仙台市文化財調査報告書第82集

仙台市
高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ

昭和60年3月

仙台市教育委員会
仙台市交通局

仙台市文化財調査報告書第82集

仙台市
高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ

昭和60年3月

仙台市教育委員会
仙台市交通局

土偶（右41.4cm、中20.5cm、左上残存長9.7cm、左下22.7cm）

1号・6～8号配石

1号配石

6号配石

8号配石

7号配石出土耳飾り

富沢水田遺跡

弥生時代の水田跡全景

序

近頃、新しい都市像をめぐって、さまざまな都市論が全国的規模で展開している。都市景観、都市におけるアメニティ、テレトピア、コンベンション都市等々の各論はまさにそれである。これらは、来るべき21世紀をめざした都市づくり政策に関する模索の現われに過ぎない。過去と未来の狭間で生きづいている現代人にとって、人間都市への復権を基調とした「文化とアメニティの再生」の懇願は、まさしく人間が永きにわたって生きぬいてきた足跡をもって語る歴史的所産といっても過言ではない。

こうした渦の中で、文化を語る資源として取り扱う文化財行政の在り方についても、誠心をつくした方策の樹立を考慮しなければならないことは論をまつまでもない。

本市に於ける文化財行政も、やっと途についたとはいえ、今後の活気ある発展と更なる展開に期待する所が大である。

とりわけ今回の仙台市高速鉄道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、本年で四年目を迎え、本線敷の調査が一応の完了をみたことと、多大の調査成果を得たことは誠に意義深いものがある。これまでの通史的概念を大きく変えなければならない事実の発見が相次いだこともあって、改めてその遺跡がもつ意味の大きさを考えずには置かない調査でもあったといえる。

ここにその概報が公開されるに当り、これに関与された多くの機関や関係各位に対し深く感謝を申し上げる次第である。さらにまた、この小報文が市民の限りない文化への発揚と、文化財に対する啓蒙、普及の一層の進展に役立つことを切望してやまない。

昭和60年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は、仙台市高速鉄道南北線関係遺跡に係る伊古田遺跡・下ノ内遺跡・下ノ内浦遺跡・富沢水田遺跡鳥居原地区における昭和59年度の遺跡発掘調査概報である。

2．本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆　Ⅰ……篠原信彦　　Ⅱ・Ⅵ……斎野裕彦

Ⅲ……高橋勝也　　Ⅳ……工藤哲司

Ⅴ……吉岡恭平

遺構トレース　工藤、吉岡、佐藤美智雄、千葉　仁、伊藤　裕、庄子信広

遺物実測・トレース　千葉、伊藤

遺物写真　　吉岡、高橋

編集は担当職員が行った。

3．本書の土色については「新版標準土色帳」（小山・佐原：1970）を使用した。

4．調査にあたり次の方々の御教示と御助言を賜った。

宮城県教育委員会文化財保護課　　東北大学文学部考古学研究室

伊東信雄(東北学院大学)、工藤雅樹(宮城学院女子大学)、庄子貞雄(東北大学)、須藤隆(東北大学)、藤原宏志(宮崎大学)、星川清親(東北大学)、桑月　鮮(東北大学)、佐川正敏(東北大学)

5．本書に関係する出土遺物・作成図面・写真は一括して仙台市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

序　　文
例　　言
Ⅰ．調査経過……1
Ⅱ．遺跡の立地……4
Ⅲ．伊古田遺跡……5
　1．遺跡の立地　　2．調査の方法
　3．調査の概要　　4．まとめ
Ⅳ．下ノ内遺跡……17
　1．遺跡の立地　　2．調査の方法
　3．調査の概要
Ⅴ．下ノ内浦遺跡……19
　1．遺跡の立地　　2．調査の方法
　3．調査の概要　　4．まとめ
Ⅵ．富沢水田遺跡……55
　1．遺跡の立地　　2．層　位
　3．調査の概要

挿図・表目次

第1図　調査区位置図……2
第2図　遺跡の位置と周辺遺跡……3
伊古田遺跡
第3図　グリッド配置図……6
第4図　Ⅰ・Ⅲ区全体図……7
第5図　Ⅱ区全体図……8
下ノ内遺跡
第6図　Ⅳ区全体図……18
第7図　Ⅳ区6層以下断面図……18
下ノ内浦遺跡
第8図　グリッド配置図……19
第9図　遺構配置図……21・22
第10図　ＳＩ11・12竪穴遺構……23
第11図　出土遺物(1)……24
第12図　ＳＫ 140土壙……24
第13図　1・6～8号配石遺構……25・26
第14図　ＳＫ24・31・38・87土壙……29
第15図　出土遺物(2)……30
第16図　出土遺物(3)……31
富沢水田遺跡
第17図　6層上面落ち込み杭列……56
第18図　第3杭列断面図……56

第19図　調査区位置図……57・58
第20図　東壁断面図……57・58
第21図　12層上面平面図……59
第１表　本調査一覧表……１

写真図版目次

伊古田遺跡
写真１　Ⅰ区遺物出土状況……10
写真２　Ⅲ区遺物出土状況……10
写真３　壺出土状況……11
写真４　遺物出土状況……11
写真５　土偶出土状況……11
写真６　土偶頭部出土状況……12
写真７　土偶出土状況……12
写真８　土偶出土状況……13
写真９　鉢出土状況……13
写真10　壺出土状況……13
写真11　Ⅱ区全景……14
写真12　現地説明会……14
写真13　出土遺物(1)……15
写真14　出土遺物(2)……16
下ノ内遺跡
写真15　Ⅳ区全景……17
写真16　Ⅳ区西壁断面……18
下ノ内浦遺跡
写真17　Ａ―10・11区断面……33
写真18　ＳＩ10・ＳＩ11竪穴遺構……33
写真19　ＳＫ 140 土壙……33
写真20　ＳＫ９土壙……34
写真21　尖頭器出土状況……34
写真22　11層遺物出土状況……34
写真23　12層遺物出土状況……35
写真24　13層配石・土壙群……35
写真25　13層配石・土壙群……35
写真26　13層配石・土壙群……36
写真27　13層配石・土壙群……36
写真28　１・６～８号配石……36
写真29　13層配石・土壙群……37
写真30　13層配石・土壙群……37
写真31　１・６～８号配石下の土壙……37
写真32　２～５号配石……38
写真33　６・８号配石……38
写真34　１号配石……38
写真35　１号配石……39
写真36　１号配石……39
写真37　１号配石の土壙……39
写真38　１号配石土壙内出土の耳飾り……40
写真39　２号配石……40
写真40　２号配石の土壙……40
写真41　３号配石……41
写真42　３号配石の土壙……41
写真43　４号配石……41
写真44　４号配石の土壙……42
写真45　５号配石……42
写真46　５号配石の土壙……42
写真47　６号配石……43
写真48　６号配石……43
写真49　６号配石の土壙……43
写真50　７号配石……44
写真51　７号配石……44

写真52　7号配石の土壙……44
写真53　7号配石土壙内出土の耳飾り……45
写真54　8号配石……45
写真55　8号配石……45
写真56　8号配石の土壙……46
写真57　8号配石出土の鉢……46
写真58　9号配石……46
写真59　1号埋設土器……47
写真60　2号埋設土器……47
写真61　3号埋設土器……47
写真62　4号埋設土器……48
写真63　5号埋設土器……48
写真64　SK24土壙……48
写真65　SK31土壙……49
写真66　SK38土壙……49
写真67　SK87土壙……49
写真68　5層全景……50
写真69　SI 1住居跡……50
写真70　SI 2住居跡……50
写真71　SI 3住居跡……51
写真72　SI 4住居跡……51
写真73　SI 5住居跡……51
写真74　SI 7住居跡……52
写真75　SI 10住居跡……52
写真76　SI 8住居跡……52
写真77　出土遺物(1)……53
写真78　出土遺物(2)……54

富沢水田遺跡

写真79　東壁断面……57
写真80　6層上面落ち込み全景……60
写真81　11層上面全景……60
写真82　12層上面全景……60

Ⅰ. 調 査 経 過

仙台市高速鉄道南北線建設に伴う遺跡の発掘調査は、本年度で4年目を迎え、4月11日から調査を開始した。本年度は鍋田工区から泉崎駅工区の本線敷部分の調査を完了することを目標とし、伊古田・下ノ内・下ノ内浦・富沢水田遺跡の4ヵ所を実施した。

伊古田遺跡は、昨年度からの継続調査で、3月末に調査を打ち切った遺物包含層の調査を再開するとともに、今まで使用中の道路部分の調査を行った。遺物包含層の調査では、縄文時代後期中葉のまとまった縄文土器と共に土偶9点が出土した。土偶は41.4cmの大きさのものが出土し、今まで全国で出土している土偶の中でも最大級の大きさである。

下ノ内遺跡は、昨年度からの継続調査で、平安時代の竪穴住居跡1軒、縄文時代の河川跡、遺物包含層などの調査を実施し、5月26日に完了した。

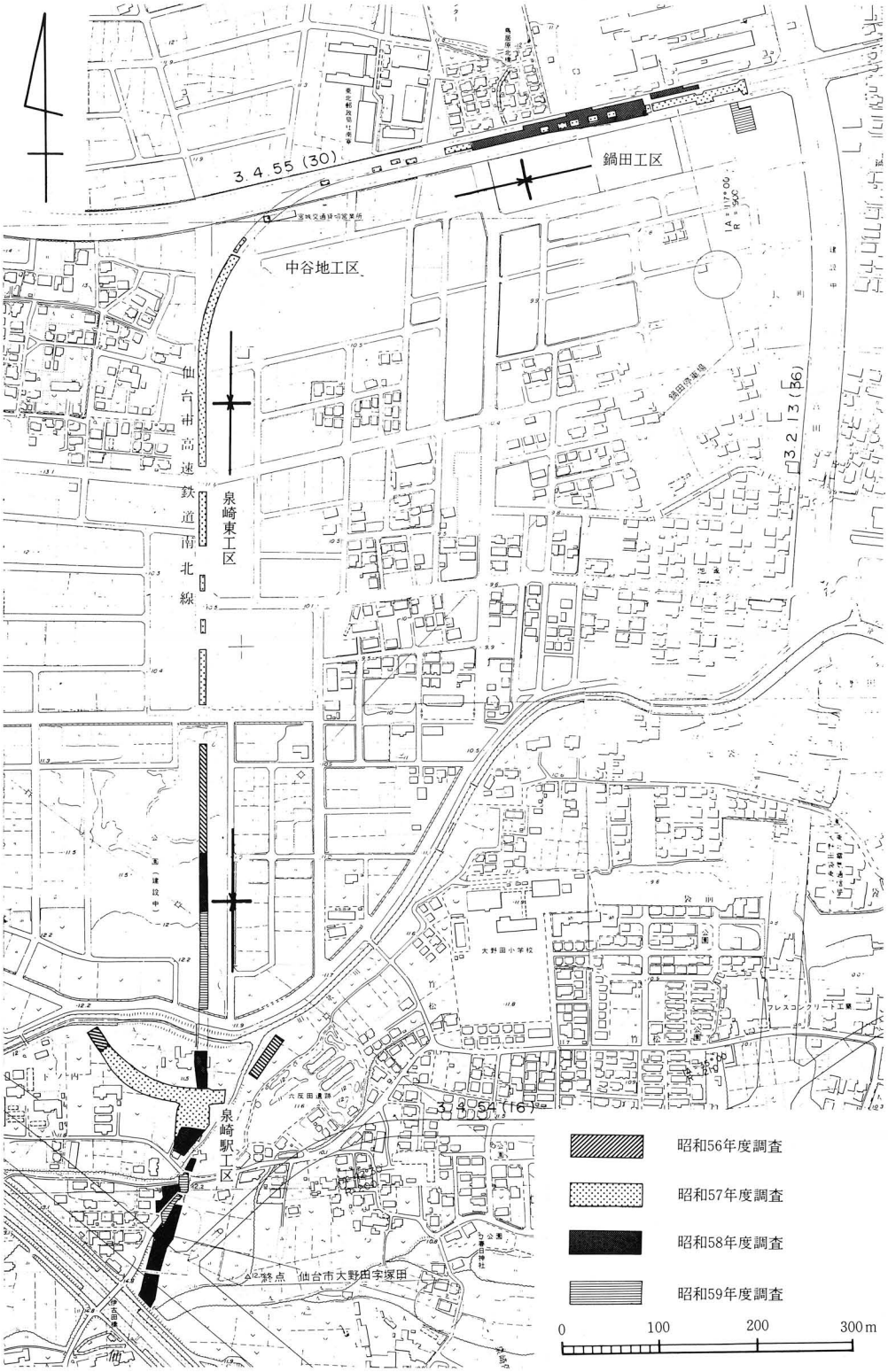
下ノ内浦遺跡は、昨年度からの継続調査で、Ⅱ～Ⅳ区の調査を実施した。地表より4m下から、仙台市内では初めて縄文時代早期の押型文土器の包含層、土壙、竪穴遺構などが検出された。また、縄文時代後期前葉の配石遺構9基、土壙120基、埋設土器5基が検出され、この時期の墓制を考える上で貴重な発見となった。これらの遺構を覆うように遺物包含層があり、縄文土器が平箱で約400箱ほど出土した。その他には奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、河川跡等が検出された。この遺跡は重層構造の遺跡の中でも、各時代の遺構・遺物が幾層にも重なっている。

富沢水田遺跡では鳥居原地区の鍋田変電所の調査で、昨年度からの継続調査である。弥生時代と平安時代の水田跡が検出された。弥生時代の水田跡は2つの面で検出され、下層の水田跡は1枚の水田の規模が12㎡と小区画の水田跡である。

調査を実施するにあたり、仙台市交通局高速鉄道建設本部と度々の協議を行ない、昭和59年11月19日、泉崎駅工区の下ノ内浦遺跡の調査を最後に本年度の調査を終了した。当初目標の本線敷部分の調査は完了し、来年度以降に残った部分は、富沢水田遺跡の鍋田駅出入口等、泉崎駅前側道、「下ノ内・六反田」線の六反田遺跡の3ヵ所となった。

第1表　本調査一覧表

遺跡名 所在地	時代 種類	調査期間	調査面積	担当職員	備考
伊古田遺跡 仙台市大野田字塚田他	縄文・古墳～平安 集落跡	S59.4.11～ S59.8.11	590㎡	篠原信彦・工藤哲司・佐藤美智雄 高橋勝也・千葉　仁	泉崎駅工区
下ノ内遺跡 仙台市富沢四丁目	縄文～平安 集落跡	S59.4.11～ S59.5.26	560㎡	工藤哲司・佐藤美智雄	泉崎駅工区
下ノ内浦遺跡 仙台市富沢一丁目他	縄文～平安 集落跡・水田跡	S59.4.11～ S59.11.19	1,200㎡	篠原信彦・吉岡恭平・主浜光朗 千葉　仁・斎野裕彦・高橋勝也	泉崎駅工区
富沢水田遺跡（鳥居原地区） 仙台市長町南三丁目	弥生・平安 水田跡	S59.4.11～ S59.6.28	750㎡	篠原信彦・斎野裕彦	変電所


鍋田工区
中谷地工区
泉崎東工区
泉崎駅工区
仙台市高速鉄道南北線
3.4.55 (30)
3.2.13 (B6)
3.4.54 (16)
終点 仙台市大野田字塚田
昭和56年度調査
昭和57年度調査
昭和58年度調査
昭和59年度調査
0
100
200
300m

第1図　調査区位置図

遺跡番号	遺跡名称	所属時期	遺跡番号	遺跡名称	所属時期
C－196	伊古田遺跡	縄文(後)、古墳～平安	C－107	芦ノ口遺跡	平安
C－299	下ノ内遺跡	縄文(中・後)、弥生～平安	C－112	大野田遺跡	縄文(後)、奈良、平安
C－300	下ノ内浦遺跡	縄文(早・前・後)、弥生～中世	C－152	鍛冶屋敷A遺跡	奈良、平安
C－301	富沢水田遺跡	弥生、奈良、平安、中世	C－153	堀ノ内遺跡	古墳～平安
C－007	砂押古墳	古墳	C－155	原東遺跡	古墳～平安
C－008	裏町古墳	古墳	C－156	裏町東遺跡	平安
C－014	教塚古墳	古墳	C－195	富沢上ノ台遺跡	奈良、平安
C－015	金洗沢古墳	古墳	C－197	六反田遺跡	縄文(中・後・晩)、弥生～平安
C－017	金岡八幡古墳	古墳	C－198	袋東遺跡	古墳、奈良、平安
C－031	土手内横穴群	奈良、平安	C－201	富沢清水遺跡	奈良、平安
C－038	王の壇古墳	古墳	C－203	砂押屋敷遺跡	平安
C－039	春日社古墳	古墳	C－233	山口遺跡	縄文(早～晩)、弥生～中世
C－040	五反田古墳	古墳	C－266	元袋Ⅱ遺跡	縄文(後)、奈良、平安
C－043	鳥居塚古墳	古墳	C－427	土手内窯跡	平安
C－046	五反田箱式石棺	古墳	C－520	富沢館跡	奈良、平安、中世
C－052	五反田木棺墓	古墳	C－658	元袋古碑群	中世
C－106	三神峯遺跡	縄文(早・前・中)			

第２図　遺跡の位置と周辺遺跡

Ⅱ．遺跡の立地と環境

仙台市高速鉄道南北線は、七北田を起点とし、七北田丘陵、仙台市街地をのせる段丘群を南下し、広瀬橋付近から宮城野海岸平野へ入り、終点泉崎に至る。今年度の調査は、昨年度に引き続き宮城野海岸平野の中の郡山低地において行なわれた。郡山低地は北東縁を広瀬川、南縁を名取川、北西縁を長町―利府線により画されている。ここには広瀬・名取両河川により形成された自然堤防、後背湿地が見られる。自然堤防は広瀬川右岸、名取川左岸に見られ、名取川左岸には旧笊川が曲流している。また郡山低地の中央には南北に走る自然堤防が見られる。これら自然堤防の背後には後背湿地が広がっている。

調査対象区域は、郡山低地の中でもその西半部である。ここには北半の鳥居原、中谷地、泉崎に広範な後背湿地が広がり、南半の下ノ内、大野田には自然堤防が見られる。調査は、富沢水田遺跡、下ノ内浦遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡で行なわれた。富沢水田遺跡は低地西半部ほぼ中央の後背湿地に立地している。他の３遺跡は自然堤防上に立地しており、下ノ内浦遺跡は旧笊川の左岸に、下ノ内遺跡と伊古田遺跡は右岸に位置する。

この郡山低地西半部及びその周辺は、仙台市内でも数多くの遺跡が分布する地域である。昭和51～53・59年度に調査された六反田遺跡では、沖積平野においては県内で最も古い縄文時代中期中葉（大木8ｂ式期）の竪穴住居跡や、後期初頭の竪穴住居跡、古墳・奈良・平安時代の竪穴住居跡等が検出されている。また昭和53・56・57年度に調査された山口遺跡では、縄文時代早期後半の遺物、中期・後期の土壙等、弥生時代の遺物、奈良・平安時代の竪穴住居跡、平安時代・中世の水田跡が検出されており、両遺跡とも重層構造の遺跡である。両遺跡周辺での当該関連調査においても、縄文時代早期から中世までの遺構・遺物が発見されるという同様な成果が得られ、郡山低地西半部には重層構造の遺跡が数多く存在することが判明している。その他には縄文時代の遺跡として三神峯遺跡・大野田遺跡・元袋Ⅱ遺跡などがある。古墳時代の遺跡は数多く、西多賀周辺には裏町古墳・金洗沢古墳・砂押古墳等が、大野田には鳥居塚古墳・王の壇古墳・春日社古墳、大野田１号・２号古墳等がある。また、富沢水田遺跡の北には金岡八幡古墳が、西北部には教塚古墳がある。中世では新笊川の南に富沢館跡がある。

尚、郡山低地西半部は旧来自然堤防上に集落や畑が営まれ、後背湿地には水田が広がっていたが、近年行なわれた土地区画整理及び高速鉄道建設に伴ない、開発化が急速に進み、その景観は変貌の一途をたどっている。

Ⅲ．伊古田遺跡（C-196）

１．遺跡の立地

伊古田遺跡は、国鉄長町駅から西南西へ約1.6km、仙台市体育館の南に位置し、名取川、及びその支流である旧笊川とによって形成された自然堤防上に立地する。

周辺には、山口遺跡や六反田遺跡、下ノ内遺跡、富沢館跡などの縄文時代から中・近世にかけての遺跡が多数存在している。また富沢水田遺跡では最近、弥生時代の水田跡が発見されている。遺跡周辺は、盛土以前には大部分が畑地、一部が水田として利用されていた。標高は12m前後である。なお、今回調査した部分は、大部分が仙台市高速鉄道泉崎駅の駅舎部分に当たる。

２．調査の方法

今回主に調査を行なったⅢ区は昨年調査したⅠ区のすぐ西側の部分である。調査前までは道路として利用されていた部分であり、グリッドもⅠ区と調査区が接していることから、そのままⅠ区の３ｍ×３ｍのグリッドを延長する形をとり、その範囲はＡ～Ｇ、26～40に及ぶ。

Ⅱ区は当初、道路の交差点部分にあたり、調査を予定していなかった部分であったが、工事中に竪穴住居跡の一部と思われる焼土面が発見され、緊急に調査を実施した箇所である。よって、グリッドを設定する余裕もなく、平板測量で調査を行なった。調査面積は、Ⅱ区、Ⅲ区合わせて、約590㎡である。

３．調査の概要

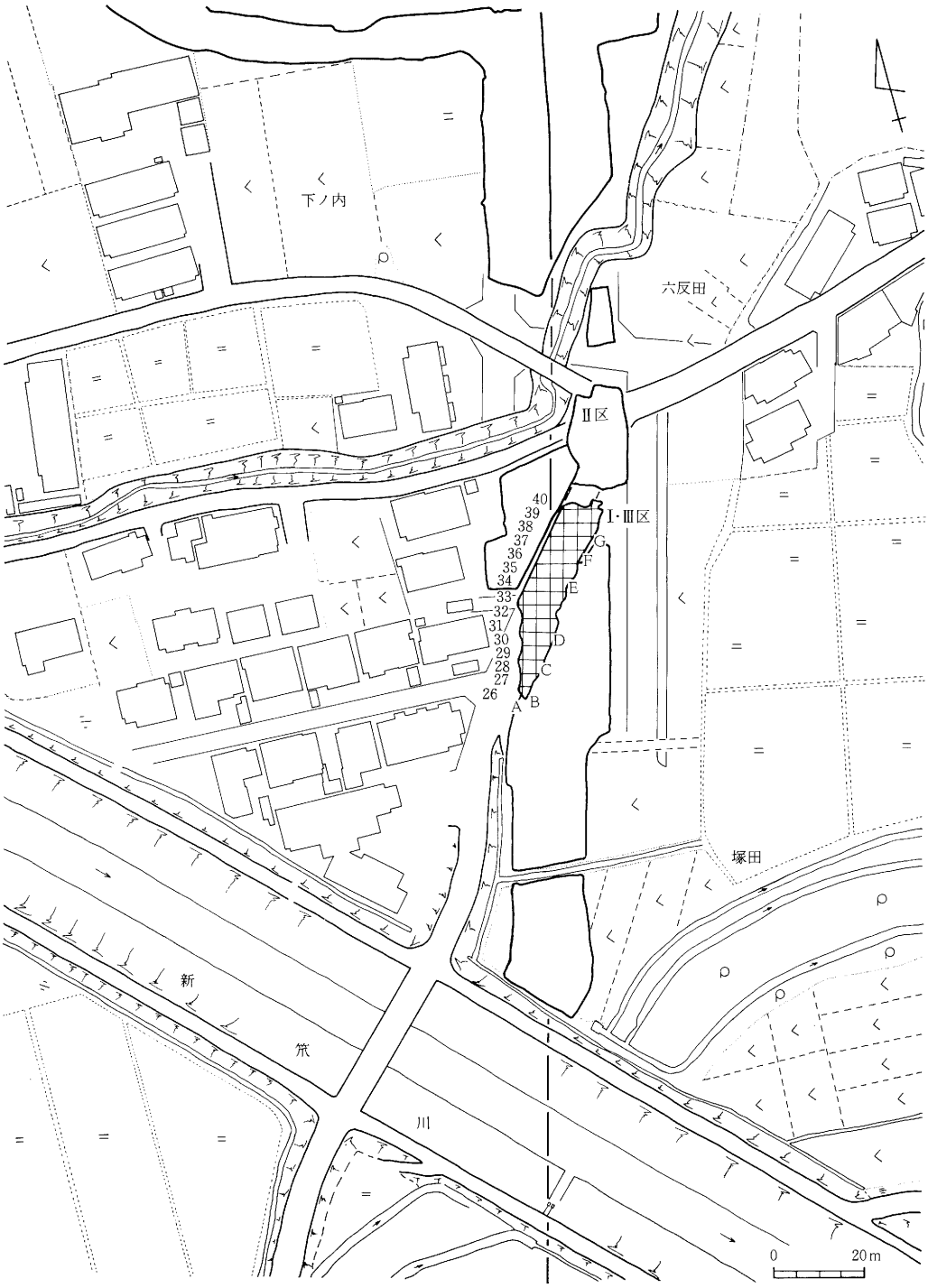
Ａ．基本層位（第４図）

基本層位は１～８層まで確認された。１・２層は旧耕作土である。３層は暗褐色シルト層であるが、この層の上面で古墳時代前期、奈良時代、平安時代の遺構が検出されている。４層が灰黄褐色のシルト層、５ａ～５ｃ層が暗褐色のシルト層、６層が黒褐色のシルト層である。この６層が縄文時代後期中葉の遺物包含層にあたる。７・８層が褐色のシルト層であり、８層は７層に比較して若干砂質気味である。

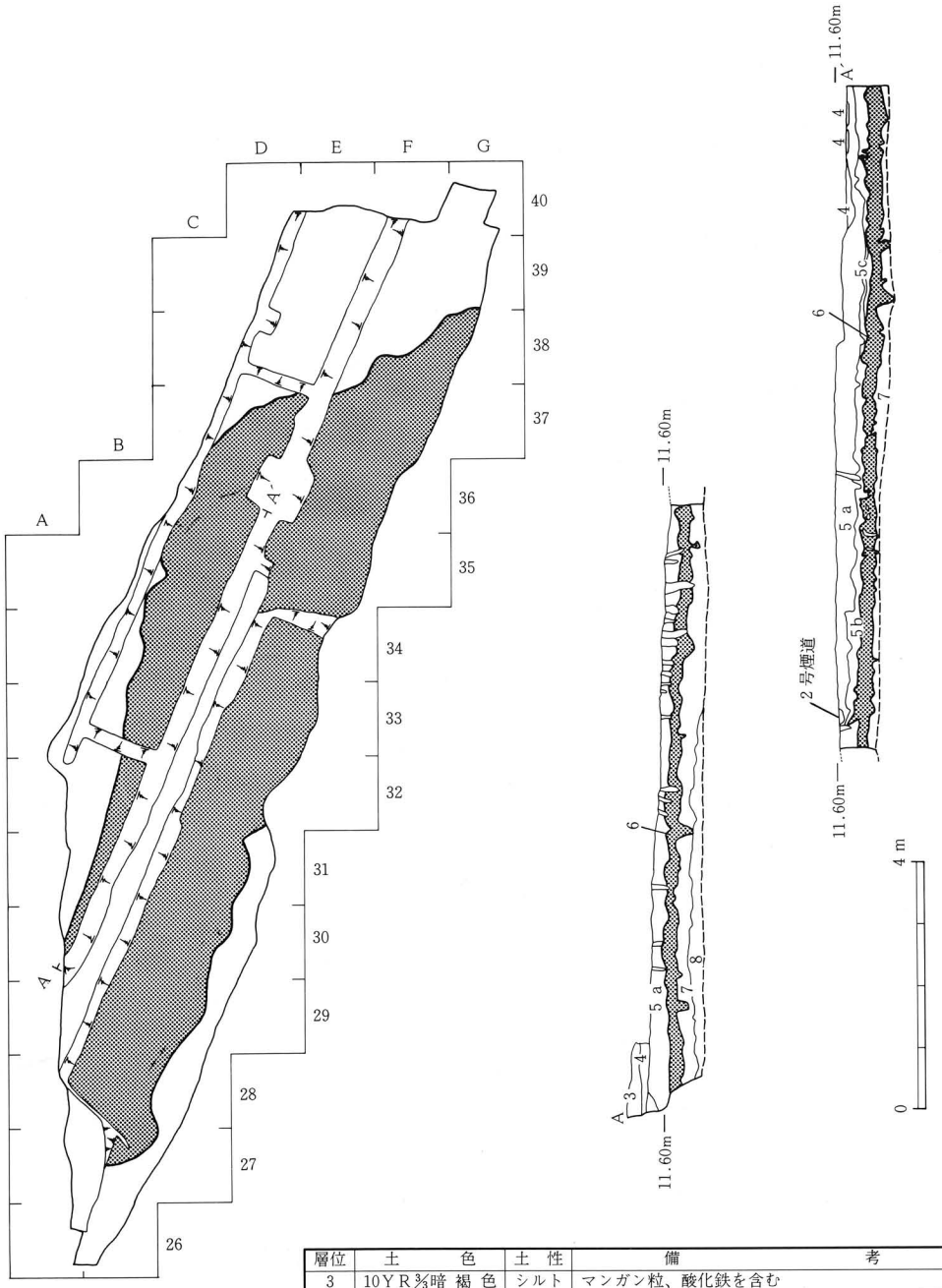
Ｂ．縄文時代後期の遺構と遺物

遺物包含層（第４図、写真２）

グリッドＢ～Ｇ、27～38の範囲で確認された。層位は基本層位の第６層黒褐色シルト層である。包含層は北東から南西へかけて、細長い楕円状の広がりを見せるが、その中央部と西側を下水道と上水道の攪乱によって破壊されているため、遺存状態は必ずしも良くはない。包含層は平均して20cm前後の厚さで堆積しているが、層の上・下面ともかなりみだれた状態になっている。これは人為的と言うよりも層が堆積する時に自然的な作用によって、このようになった


下ノ内
六反田
Ⅱ区
Ⅰ・Ⅲ区
40
39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
A
B
C
D
E
F
G
塚田
新
笊
川
0
20m

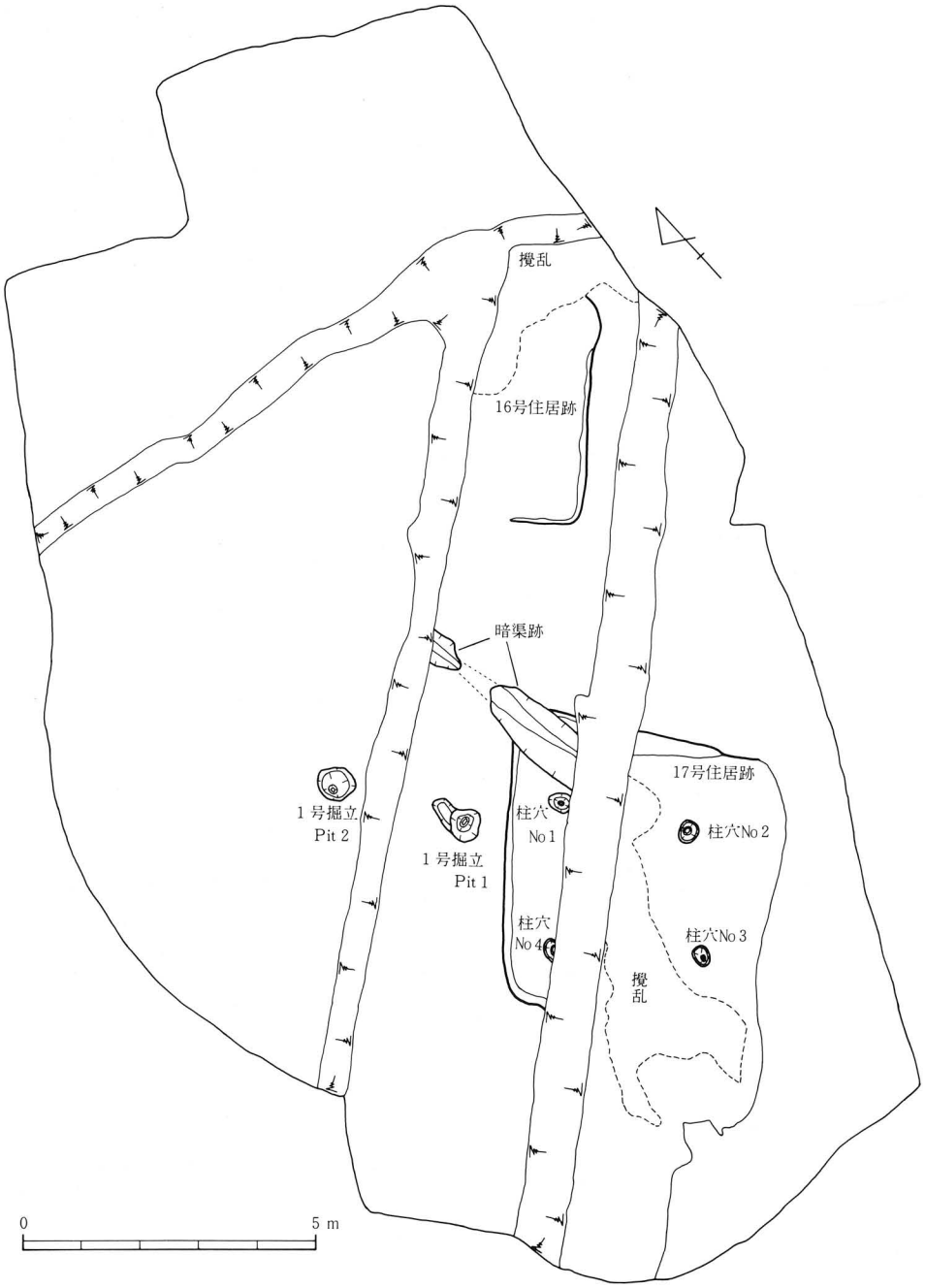
第３図　グリッド配置図



層位	土　　色	土　性	備　　考
3	10YR3/3暗 褐 色	シルト	マンガン粒、酸化鉄を含む
4	10YR5/2灰黄褐色	シルト	少量のマンガン粒を含む
5 a	10YR3/3暗 褐 色	シルト	マンガン粒を含む
5 b	10YR3/3暗 褐 色	シルト	6層の土をブロック状に含む
5 c	10YR3/3暗 褐 色	シルト	少量の焼土粒を含む
6※	10YR3/2黒 褐 色	シルト	炭化物、黄褐色の砂、焼土粒、土器片を含む
7	10YR4/6褐　　色	シルト	酸化鉄、マンガン粒を若干含む
8	10YR4/6褐　　色	シルト	酸化鉄、マンガン粒を若干含む、7層に比べ砂っぽい

※縄文包含層

第4図　Ⅰ・Ⅲ区全体図


撹乱
16号住居跡
暗渠跡
17号住居跡
1号掘立
Pit 2
1号掘立
Pit 1
柱穴
No 1
柱穴No 2
柱穴
No 4
柱穴No 3
撹
乱
0
5 m

第5図　Ⅱ区全体図

ものと思われる。包含層は、薄く段階的に掘り下げたが遺構は検出されなかった。

土器（写真３、４、９、10、13―３～12、14―１～13）

包含層から出土した土器は、破片の点数で5000点を超える量である。しかし現在の段階では、破片の点数に比べ接合により、完形、あるいはそれに近い状態まで復原できる個体の割合は低いようである。

土器の器形は浅鉢から深鉢、壺形土器など多様である。文様のモチーフも浅鉢などで、口縁部付近を平行する沈線で何段かに区画し、その段を下垂する沈線で連結し縄文を施文したもの(写真13―７・８・９、14―１・５）や、曲線の沈線で文様を描き、磨消縄文の手法を使ったもの（写真13―12、14―２・10・13）などがある。なお粗製土器もかなりの量が出土している。

平行沈線の文様を持つ土器は、加曽利ＢⅠ・Ⅱ式に類例を見ることができるものであり、その他の土器も含めて、縄文時代後期中葉、宝ケ峯式の時期にあたるものと考えられる。

土偶（写真５、６、７、８、13―１～３）

土偶は今回の調査で、10体分程の破片が出土している。その中で完形に近い状態まで接合できたのは４体である。それらの土偶は、破片も含めてすべて中空のものはなく、ソリッドのものばかりである。中でも写真５の土偶は接合すると体長41.4cmにもなり日本最大級の大きさである。４体のうち３体は立像の形態であり、いずれも顔と頭部を別々に作り出している。写真13―２は顔面に沈線による文様が施されている。写真13―１は、頭部と体部が９ｍ程はなれて出土している（写真６、７）。接合された３体の立像の土偶は、すべて右足の破片が発見されず、この点も注目すべきポイントかもしれない。

Ｃ．平安時代の遺構と遺物

Ⅱ区３層上面で、16、17号住居跡、１号掘立柱建物跡が検出された（第５図、写真11）。Ⅱ区は調査区中央に縦横に埋設管の攪乱が走り、その他の攪乱もあり、かなり遺存状況の悪い調査区である。16号住居跡も床面の一部と若干の壁の立ち上がりを検出できたのみであった。17号住居跡も攪乱によってかなり遺存が悪く、柱穴は検出できたが、床面、壁とも一部しか検出することができなかった。中央の暗渠跡は出土遺物から17号住居跡とあまり時期差のない遺構と考えられる。

４．ま と め

- 伊古田遺跡は、縄文時代後期中葉、古墳時代、奈良時代、平安時代の遺構が存在する遺跡である。
- 縄文時代後期中葉の遺物包含層からは、宝ヶ峯式期の遺物が多量にまとまって出土しており、一緒に出土した土偶の中には、体長41.4cmを計る日本最大級のものが存在した。

写真１　Ⅰ区遺物出土状況
(縄文後期遺物包含層

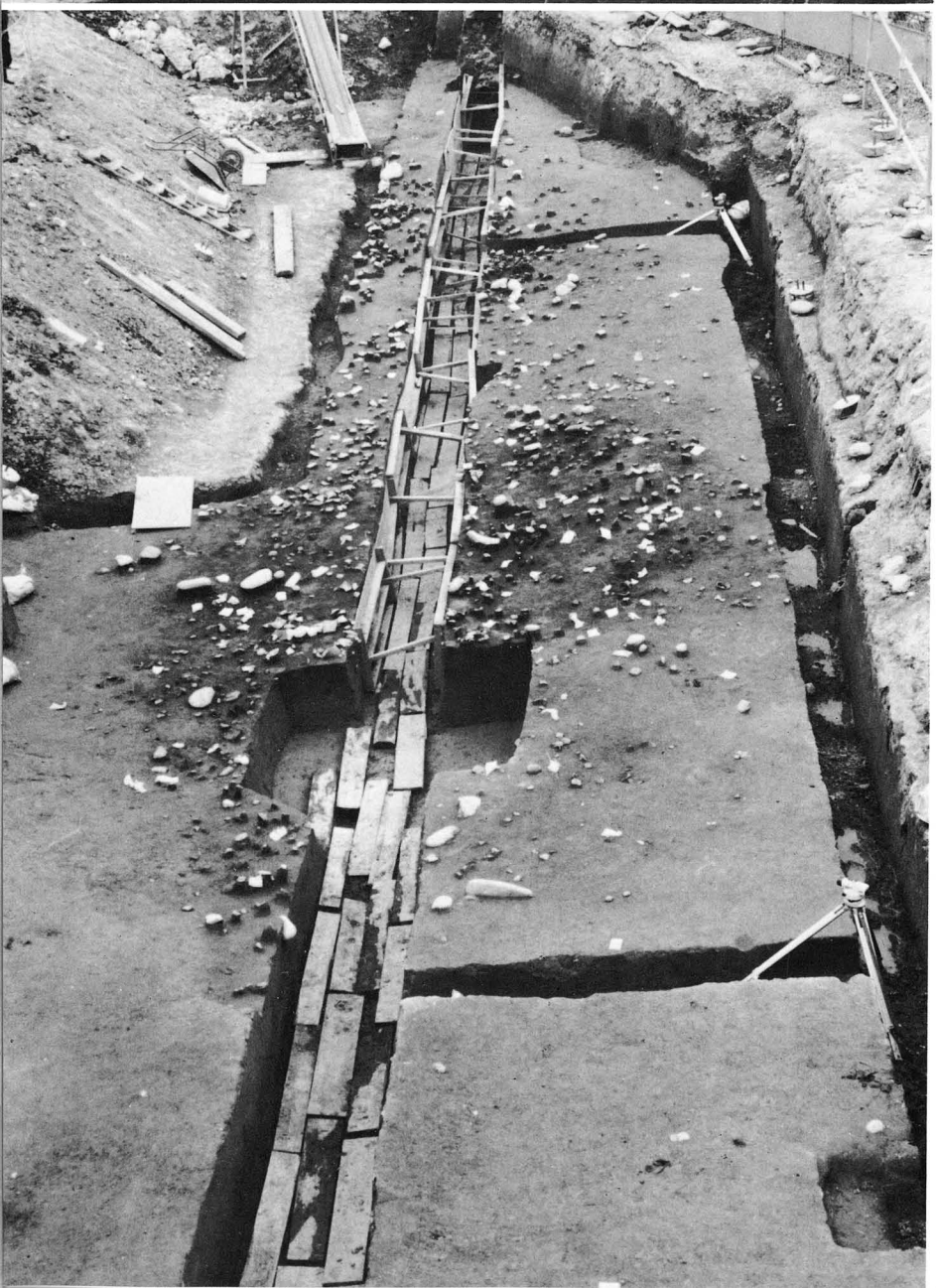


写真２　Ⅲ区遺物出土状況
(縄文後期遺物包含層

写真３　壺出土状況

写真４　遺物出土状況

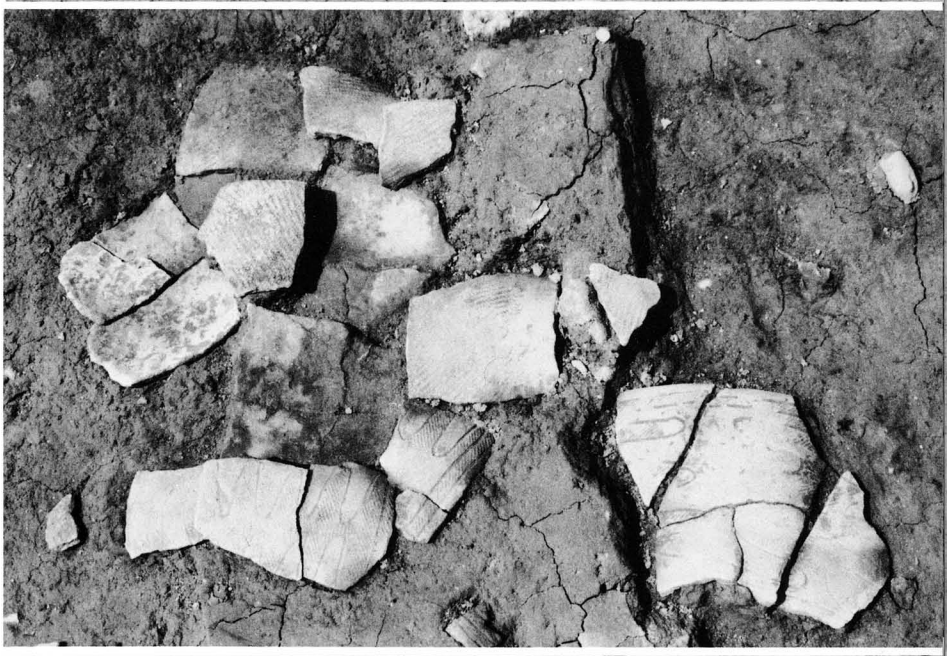


写真５　土偶出土状況

写真６　土偶頭部出土状況

写真７　土偶出土状況

写真８　土偶出土状況

写真９　鉢出土状況

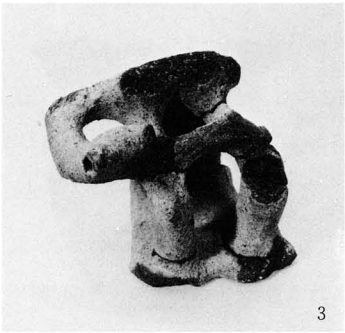
写真10　壺出土状況

写真11　Ⅱ区全景

写真12　現地説明会

1

2

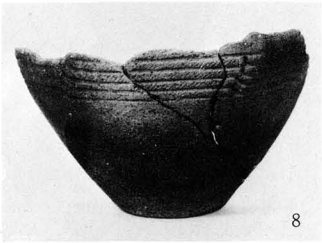

3

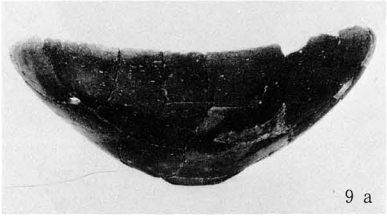
4

5

6

7


8


9 a

10

11

9 b

12

写真13　出土遺物(1)(縄文時代遺物包含層)

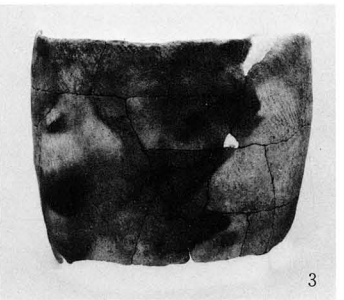


写真14　出土遺物(2)(縄文時代遺物包含層)

Ⅳ．下ノ内遺跡（C—299）

1．遺跡の立地

旧笊川の南岸の標高12m前後の自然堤防上に立地する。南西側は新笊川を境として後背湿地へと移行する。旧笊川の対岸には山口遺跡・下ノ内浦遺跡が接し、南東側では六反田遺跡・伊古田遺跡と接している。

2．調査の方法

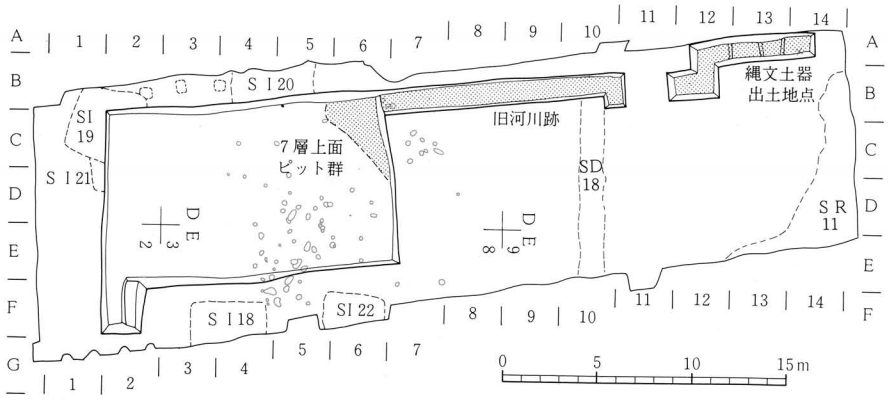
今年度は、前年度に行なったⅣ区の５層までの調査に引き続き、Ⅳ区の６層以下の調査を行なった。調査は前年度同様に３×３ｍグリッドを基本とし、東西方向にＡ～Ｇ・南北方向に１～14グリッドの地区内約 480 ㎡を調査した。

3．調査の概要

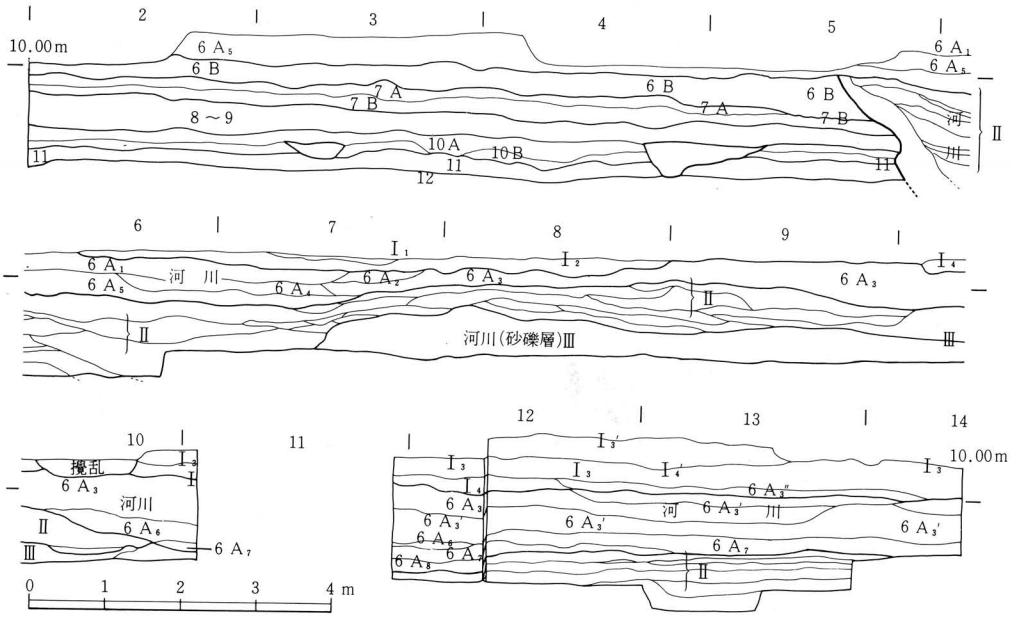
７層上面では、Ｃ～Ｆ・３～７グリッド内で柱痕跡を検出することのできない円形または楕円形のピットが多数検出された。このピット群の時期は平安時代以前という以外には詳細は不明である。また７層上面の精査によって、調査区北部を斜めに横切る旧河川跡が検出された。この旧河川は、６Ｂ層上面まで立ち上がる。川幅は23m 以上ある。川の堆積は調査した２ｍの深さまでで大きく４時期ある。

旧河川の発見によって７層以下の調査は、６グリッド以南で実施し、以下12層上面まで調査したが、各層より縄文土器片（中期～後期頃）が数点出土しただけで遺構は検出されなかった。

写真15　Ⅳ区全景



第6図　Ⅳ区全体図



No.	土色	土性	No.	土色	土性
$I_{1'}$	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	$6A_6$	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質砂
I_2	7.5YR 3/2 黒褐色	シルト質粘土	$6A_7$	10YR 4/4 褐色	シルト質砂
I_3	7.5YR 3/1 黒褐色	粘土質シルト	$6A_8$	10YR 3/4 暗褐色	シルト質砂
$I_{3'}$	7.5YR 4/3 褐色	粘土質シルト	Ⅱ		砂礫層とシルト層の互層
I_4	7.5YR 3/4 暗褐色	砂質シルト	Ⅲ		砂礫層
$I_{4'}$	7.5YR 3/4 黒褐色	砂質シルト	6B	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土
$6A_1$	7.5YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト	7A	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土
$6A_2$	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト	7B	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土
$6A_3$	7.5YR 3/4 暗褐色	砂質シルト	8～9	7.5YR 3/4～4/4 褐色～暗褐色	砂質シルト・シルト質粘土
$6A_{3'}$	10YR 5/6 黄褐色	シルト質砂	10A	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土
$6A_{3''}$	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト質砂	10B	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土
$6A_4$	7.5YR 4/6 褐色	粘土質シルト	11	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土
$6A_5$	7.5YR 4/3 褐色	シルト質砂	12	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土

第7図　Ⅵ区6層以下断面図(西壁)

写真16　Ⅳ区西壁断面

V．下ノ内浦遺跡（C—300）

1．遺跡の立地

下ノ内浦遺跡は、国鉄長町駅から西南西へ約1.5km、仙台市体育館の真東に位置し、名取川、及びその支流である旧笊川とにより形成された自然堤防とその後背湿地とに立地する。周辺には、山口遺跡や六反田遺跡、下ノ内遺跡、泉崎浦遺跡などの縄文時代から中・近世にかけての遺跡が多数存在している。また、富沢水田遺跡では、弥生時代の水田跡が検出されている。遺跡周辺は、盛土以前には大部分が水田、一部畑地として利用されていた。標高は10.3～12.3mで、南の旧笊川側と西側が高くなっている。

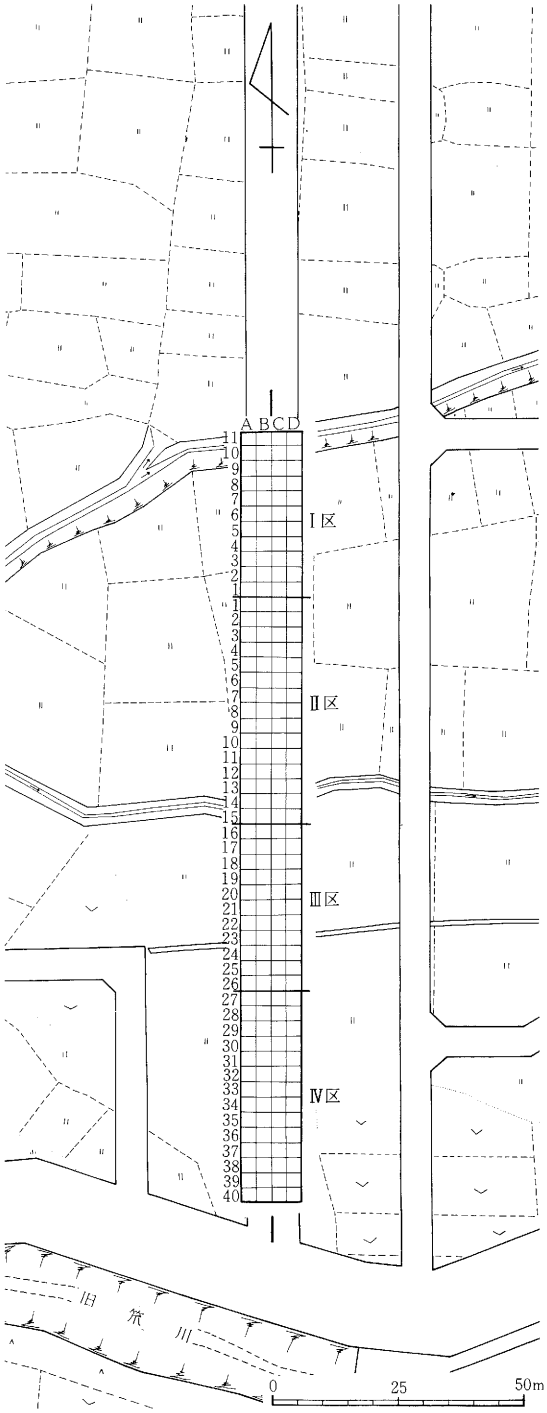
2．調査の方法

調査区は高速鉄道南北線の起点である七北田から13,569～13,686kmの部分にあたる。北側からⅠ～Ⅳ区とし、3×3mグリッドを設定した。本年度調査箇所はⅡ～Ⅳ区である。

3．調査の概要

A．基本層位（第9図4、写真17）

基本層は1～28層まで確認された。(注1) 1・2層は旧水田耕作土、3～6層は黄褐色系シルト・粘土層、7層は黒褐色系の粘土層、9～12層は黒褐色系のシルト・粘土層、13層以下はグライ化した緑灰色系の粘土質シルト層で、28層が礫層である。5層上面で奈良・平安時代の遺構が検出されている。7層は弥生時代後期の遺物包含層である。11・12層は縄文時代後期の遺物包含層であり、13層上面では後期の遺構が検出されている。15層から縄文時



第8図　グリッド配置図

代前期の遺物が数点出土している。19～22層は縄文時代早期の遺物包含層で、19ｂ～21層で遺構が検出されている。

Ｂ．縄文時代早期の遺構と遺物

19ｂ・20・21層で竪穴遺構２基、土壙７基が検出されている。19ａ～22層からは早期前葉の押型文土器片や石鏃・スクレイパー・尖頭器などの石器が出土している。

ＳＩ11竪穴遺構（第10図、写真18）　20層で検出され、ＡＢ―34グリッドに位置し、ＳＩ12を切っている。南北２ｍ、東西２ｍ以上の不整長方形を呈し、深さ約20cmを測る。底面は堅くしまっている。柱穴や炉跡などはなく、ピットが検出されただけである。堆積土中から押型文土器（第11図２、写真78―２）や剥片・チップなどの石器が出土している。

ＳＩ12竪穴遺構（第10図、写真18）　20層で検出され、Ｂ―33・34グリッドに位置し、ＳＩ11に切られる。南北2.2ｍ、東西2.8ｍの不整方形を呈し、深さ約15cmを測る。柱穴や炉跡などはなく、ピットが検出されただけである。堆積土中から土器片・チップ・剥片などが出土している。

ＳＫ 140土壙（第12図、写真19）　19ｂ層で検出され、ＡＢ―15・16グリッドに位置する。平面形は楕円形で長軸1.8ｍ、短軸1.5ｍ、深さ1.3ｍを測る。断面形は逆台形である。底面中央でピット１基が検出された。堆積土は６層で、遺物は出土していない。ＳＫ 140と同様なものとしてＳＫ９（写真20）、ＳＫ72、ＳＫ60、ＳＫ２、ＳＫ４などが検出されている。

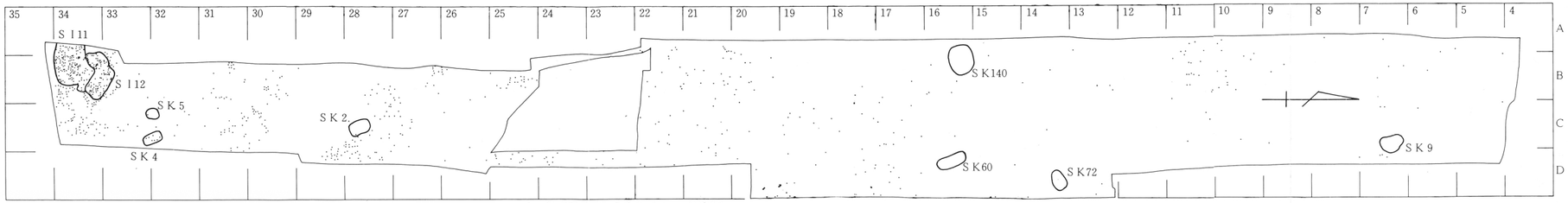
遺物包含層（第11図１・３～５、写真78―１～14）　19ａ～22層が遺物包含層で土器片125点、石器類435点出土している。土器片のほとんどは小破片である。文様の不明瞭なものが多いが、文様の看取できるものとして押型文と無文の土器片を確認している。第11図は押型文土器片で、１は口縁部片、他は体部片である。１・２・４・５は重層菱形文であり、３は矢羽状あるいは重層菱形文と考えられる。これらは日計式と呼ばれるものである。石器はチップ、剥片、石鏃、尖頭器(注２)(写真21)、スクレイパーなどが出土しているが、チップと剥片が多数を占める。

Ｃ．縄文時代後期の遺構と遺物

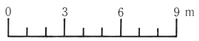
11・12層から後期前葉の遺物が多量に出土し、さらに13層上面で配石遺構９基、土壙約120基、埋設土器５基の遺構が検出された（第９図、写真22～32）。

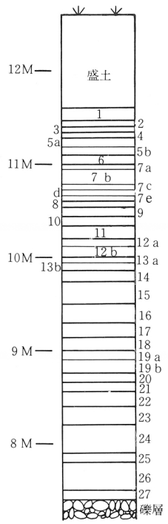
配石遺構

13層上面で９基検出されている。１・６・７・８号配石（第13図、写真28、33）はＤＥ―22～24グリッドに、２・３・４・５号配石（写真32、39～46）はＡＢ―18～20グリッドに、９号配石（写真58）はＢ―23・24グリッドに位置する。１・６～８号配石は他に比べ大型である。１・４・６～８号配石は河原石を１～２重に配し、長軸方向を立石とし、内側に小礫をつめこむという構造である。２・３号配石（写真39～42）は西端を立石としている。５号配石（写真

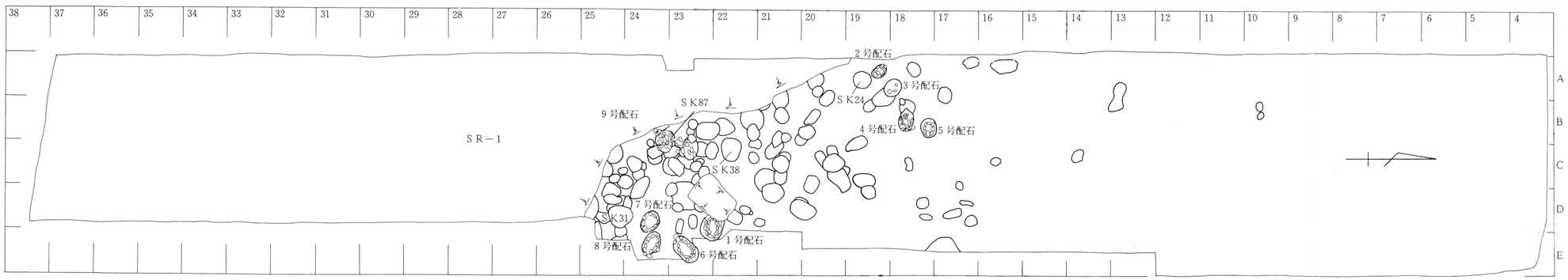


1．縄文時代早期の遺構（ドットは遺物）

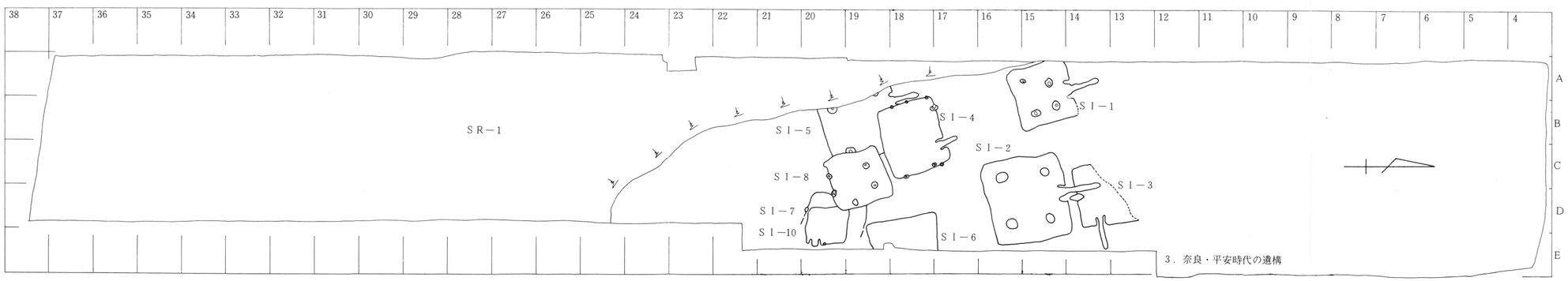




4．基本層位模式図



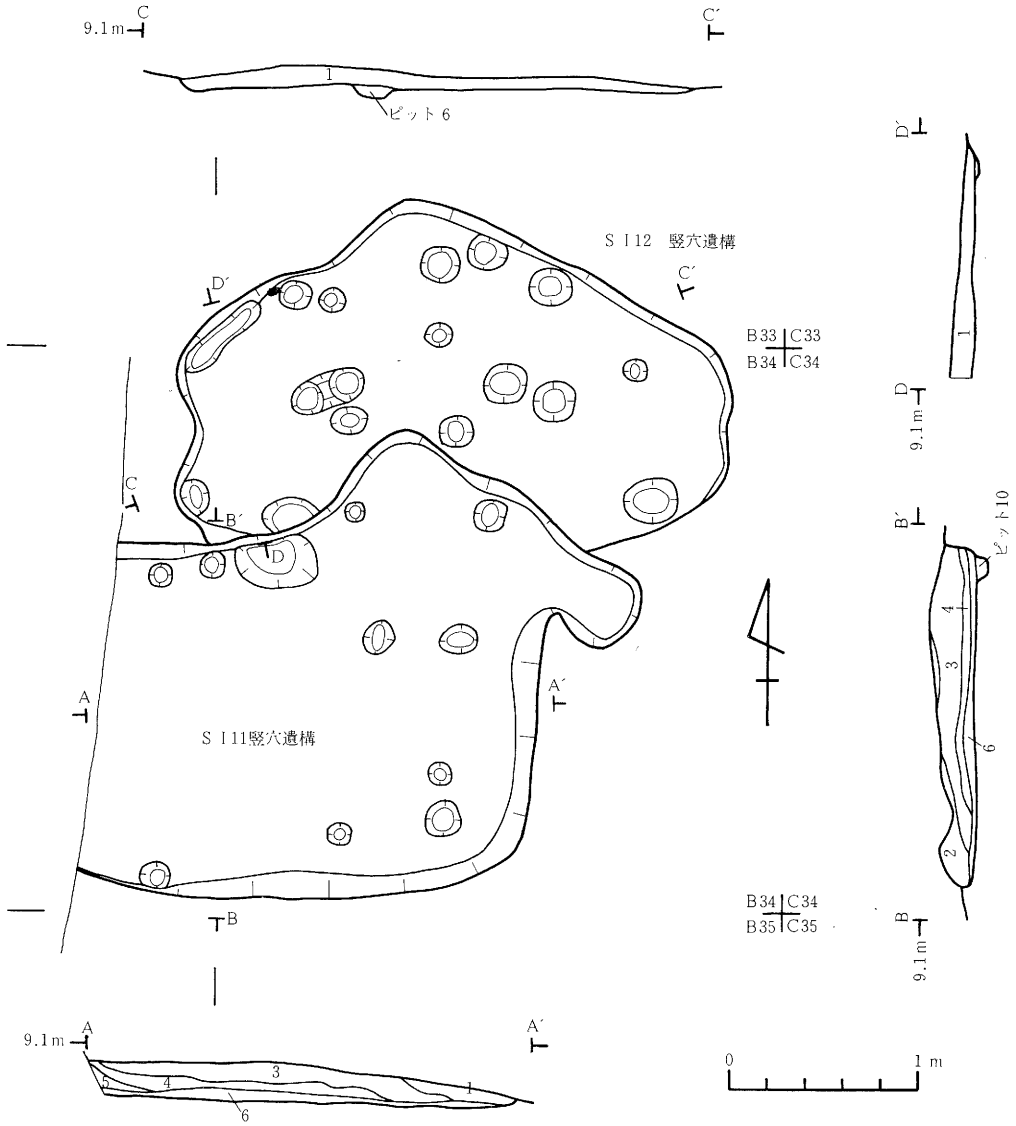
2．縄文時代後期の遺構（配石遺構と土壙群）



3．奈良・平安時代の遺構

層位	土色	土性
1		旧水田作土
2		旧水田床土
3	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト
4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト
5 a	2.5Y4/3 オリーブ褐色	砂質シルト
5 b	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土
6	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土
7 a	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土
7 b	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土
7 c	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土
7 d	10YR3/2 黒褐色	粘土
7 e	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土
8	10YR4/4 褐色	粘土
9	10YR3/2 黒褐色	粘土
10	10YR3/2 黒褐色	シルト
11	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト
12 a	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト
12 b	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト
13	10YR3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト
14	10YR4/1 灰色	粘土質シルト
15	5GY4/1暗オリーブ灰色	粘土質シルト
16	7.5GY4/1 暗緑灰色	粘土質シルト
17	10GY4/1 暗緑灰色	粘土質シルト
18	7.5GY3/1 暗緑灰色	粘土質シルト
19 a	5GY4/1暗オリーブ灰色	粘土質シルト
19 b	7.5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト
20	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト
21	7.5GY5/1 緑灰色	粘土質シルト
22	7.5GY4/1 暗緑灰色	粘土質シルト
23	7.5GY5/1 緑灰色	粘土質シルト
24	7.5GY5/1 緑灰色	シルト
25	5GY5/1 オリーブ灰色	粘土質シルト
26	5GY5/1 オリーブ灰色	粘土質シルト
27	10GY5/1 緑灰色	粘土質シルト
28		礫層

第９図　遺構配置図



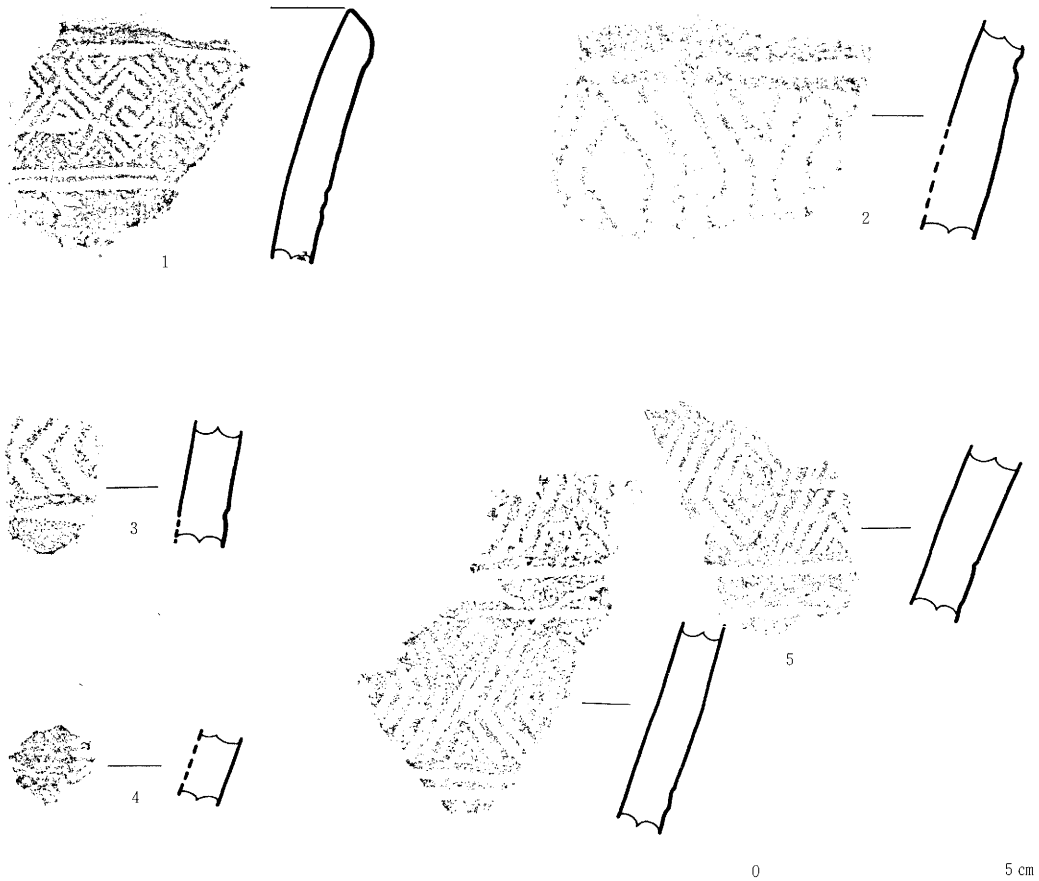
S I 11土層観察表

層 No.	土 色	土 性	備 考
1	10YR 5/6 褐 色	シ ル ト	灰黄褐土のブロック混入
2	10YR 3/3 暗 褐 色	シ ル ト	炭化物を混入
3	10YR 5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
4	10YR 5/4 褐 色	粘土質シルト	
5	10YR 3/3 暗 褐 色	シルト質粘土	
6	10YR 5/4 褐 色	シ ル ト	
ピット10	10YR 3/3 暗 褐 色	粘土質シルト	

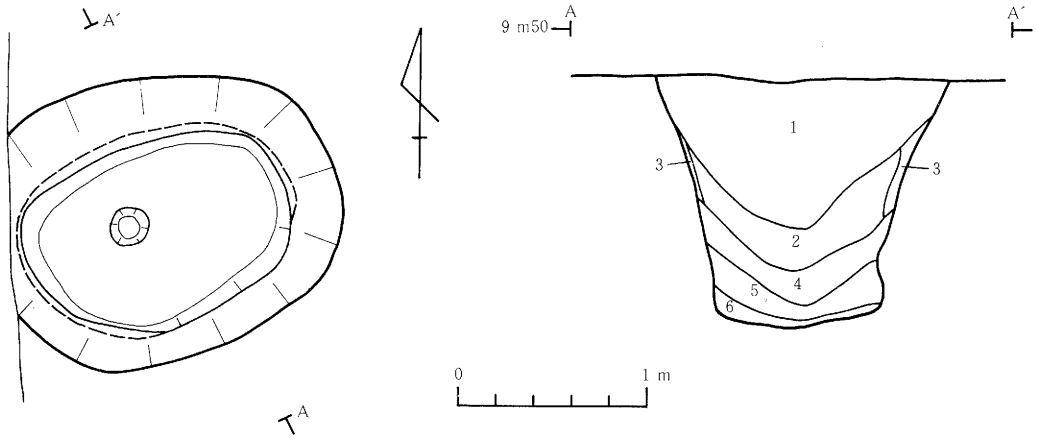
S I 12土層観察表

層 No.	土 色	土 性	備 考
1	5GY 3/1 暗オリーブ灰色	粘土質シルト	
ピット6	2.5Y 5/4 オリーブ灰色	シ ル ト	

第10図 S I 11・12竪穴遺構

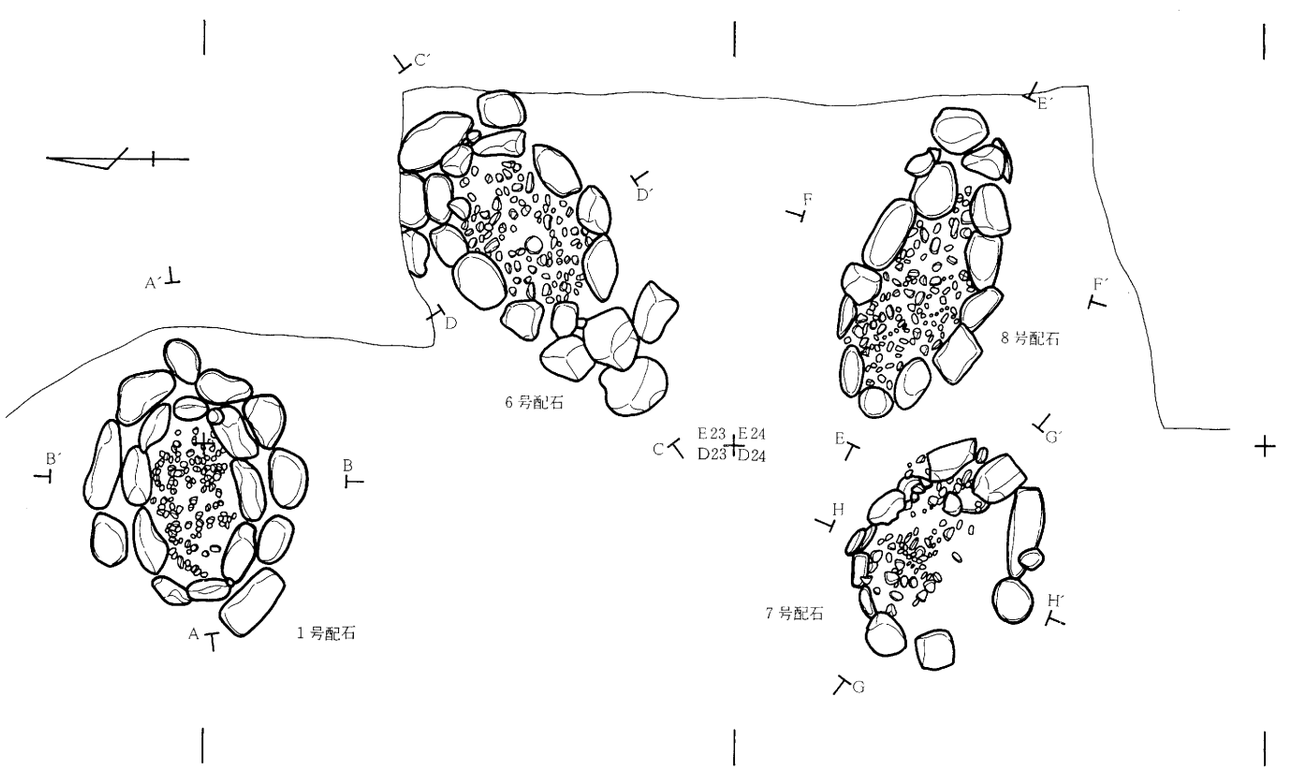


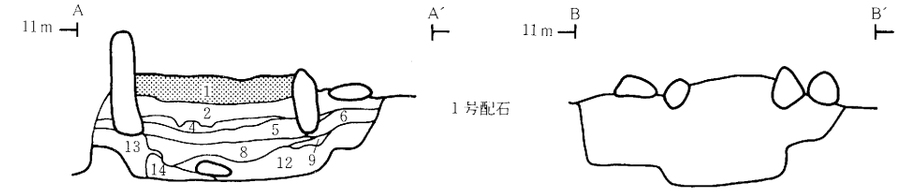
第11図　出土遺物（1）



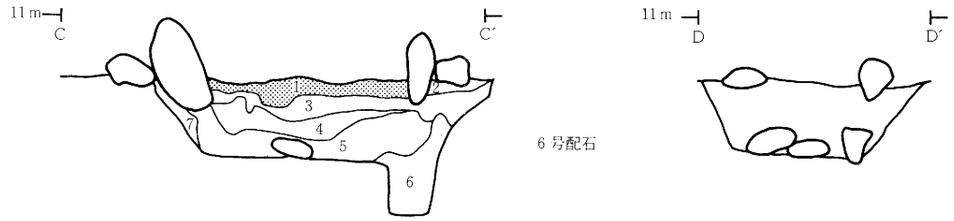
層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	5GY4/1暗オリーブ灰色	粘　土	未分解の植物遺体混入
2	2.5GY4/1暗オリーブ灰色	砂質シルト	黒褐色粘土のブロック、未分解の植物遺体混入
3	2.5Y4/1　黄　灰　色	シルト質粘土	未分解の植物遺体混入
4	5GY5/1　オリーブ灰色	砂質シルト	灰色土のブロック、未分解の植物遺体混入
5	5G5/1　緑　灰　色	シルト質粘土	未分解の植物遺体混入
6	2.5Y4/1　黄　灰　色	砂質シルト	未分解の植物遺体混入

第12図　ＳＫ 140土壙

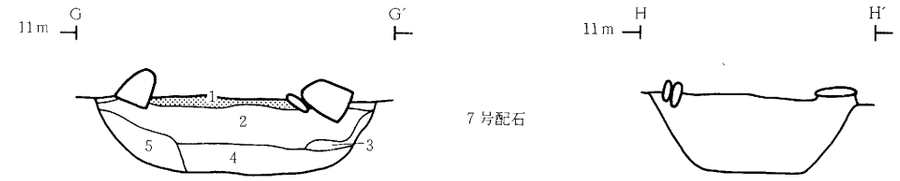




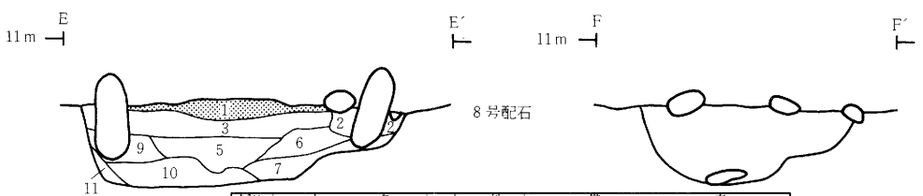
層No.	土色	土性	備考
1		小礫層	純粋な礫層、礫径２～８cm
2	10ＹＲ3/3 黒褐色	シルト質粘土	小礫を多く混入
3	7.5ＹＲ3/1 黒褐色	シルト質粘土	炭化物、骨片混入
4	10ＹＲ3/4 褐色	シルト質粘土	炭化物混入
5	7.5ＹＲ3/1 褐灰色	砂質シルト	炭化物混入
6	7.5ＹＲ3/1 黒褐色	シルト質粘土	
7	10ＹＲ3/3にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物混入
8	10ＹＲ3/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物混入
9	7.5ＹＲ3/1 黒褐色	シルト質粘土	
10	10ＹＲ3/2 灰黄褐色	シルト質粘土	炭化物混入
11	10ＹＲ3/2 灰黄褐色	シルト質粘土	灰色粘土混入
12	10ＹＲ3/1 黒褐色	シルト質粘土	８層を若干混入
13	2.5Ｙ3/2 黒褐色	シルト質粘土	炭化物・８層混入
14	10ＹＲ3/1 褐灰色	シルト質粘土	炭化物・骨片混入



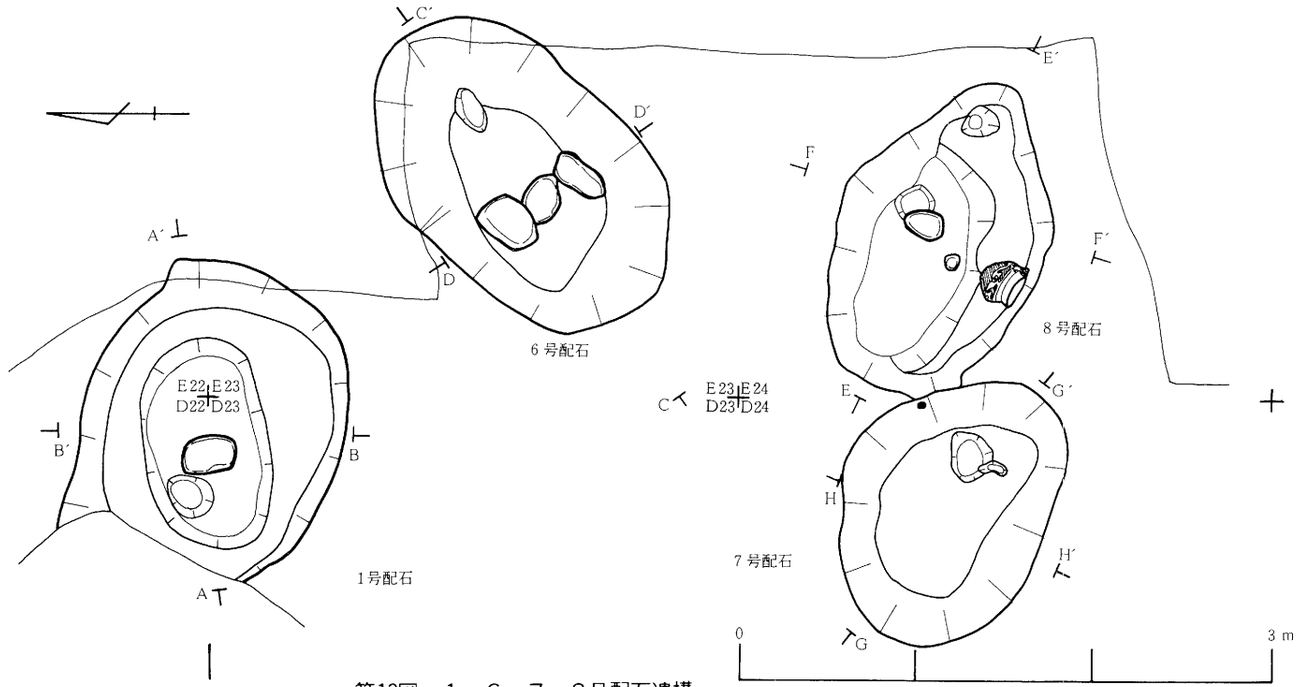
層No.	土色	土性	備考
1	10ＹＲ3/3 黒褐色	シルト質粘土	混土礫層、礫径２～８cm
2	10ＹＲ3/3 黒褐色	シルト質粘土	
3	10ＹＲ3/3 黒褐色	粘土質シルト	炭化物、小礫混入
4	10ＹＲ3/4 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土の小ブロック、炭化物混入
5	2.5Ｙ3/1 黒褐色	粘土質シルト	オリーブ灰土、炭化物、骨片混入
6	2.5Ｙ3/1 黒色	粘土質シルト	オリーブ灰土のブロック、炭化物混入
7	2.5Ｙ3/3 暗オリーブ色	粘土質シルト	



層No.	土色	土性	備考
1	10ＹＲ3/2 黒褐色	シルト	小礫（径２～５cm）混入
2	10ＹＲ3/3 黒褐色	砂質シルト	オリーブ褐色土のブロック混入
3	10ＹＲ3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物混入
4	10ＹＲ3/2 黒褐色	粘土質シルト	オリーブ褐色土のブロック混入
5	10ＹＲ3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物混入



層No.	土色	土性	備考
1	10ＹＲ3/3 暗褐色	シルト	混土礫層、礫径２～10cm
2	10ＹＲ3/3 黒褐色	シルト	炭化物混入
3	10ＹＲ3/4 暗褐色	シルト	
4	10ＹＲ3/3 暗褐色	シルト	炭化物混入
5	10ＹＲ3/4 暗褐色	シルト	褐色土のブロック混入
6	10ＹＲ3/4 暗褐色	シルト	褐色土を斑状に混入
7	10ＹＲ3/4 褐色	シルト	暗褐色土のブロックを混入
8	10ＹＲ3/3 暗褐色	シルト	褐色土を斑状に混入
9	10ＹＲ3/1 黒褐色	粘土質シルト	炭化物を混入
10	10ＹＲ3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物を混入
11	10ＹＲ3/4 暗褐色	シルト	炭化物を混入



第13図　１・６・７・８号配石遺構

45・46）は立石がない。9号配石は組石の単位がくずれてしまい集石状を呈しているが、下位から土壙数基が検出されている。

1号配石（第13図、写真34～38）　ＤＥ—22・23グリッドに位置する。北西の1部分が攪乱により破壊されている。配石の規模は長軸1.8ｍ、短軸1.3ｍで、その構造は河原石を楕円形に2重に配し、内周の長軸方向の両端の石を立石とし、内側に小礫を厚さ15cmほどつめこむというものである。長軸方向はＮ—82°—Ｅである。下部には2段に掘りこまれた土壙が検出されている。その平面形は楕円形で長軸1.7ｍ以上、短軸1.5ｍ、下位の掘りこみ平面形は楕円形で長軸1.2ｍ、短軸0.7ｍである。深さは約50cmを測る。底面でピットと扁平な礫が検出されている。ピットは径25cm、深さ20cmで、確認面直下から丹塗りの土製耳飾り1点(写真78—18)が出土している。

6号配石（第13図、写真47～49）　Ｅ23グリッドに位置する。配石の規模は長軸2.1ｍ、短軸1ｍである。その構造は河原石を楕円形に配して長軸方向の両端の石を立石とし、さらにその立石の外側に3～4個の石を配し、内側に小礫をつめこむというものである。本来は2重に配石されていた可能性もある。長軸方向はＮ—54°—Ｅである。下部の土壙の平面形は楕円形で長軸2ｍ、短軸1.2ｍ、深さ40cmを測る。底面でピットと短軸方向に並ぶ礫3個が検出された。

7号配石（第13図、写真50～53）　Ｄ24グリッドに位置する。配石の規模は長軸1.4ｍ、短軸1.1ｍで、その構造は河原石を楕円形に配し、長軸方向の両端の石を立石としたものである。内側の小礫は他にくらべ少なく、また立石はひとつの礫を半割したものである。長軸方向はＮ—52°—Ｗである。下部の土壙の平面形は不整楕円形で長軸1.6ｍ、短軸1.2ｍ、深さ45cmを測る。底面でピットが確認され、そのプラン上面にのる状態で土製耳飾りが2点出土している。土製耳飾り(写真78—19・20)は径2cmの丹塗りのものである。

8号配石（第13図、写真54～57）　Ｅ24グリッドに位置する。配石の規模は長軸1.7ｍ、短軸0.8ｍで、その構造は河原石を楕円形に配し、長軸方向の両端の石を立石とし、内側に小礫をつめこんだものである。下部の土壙の平面形は不整楕円形で長軸1.8ｍ、短軸1.2ｍ、深さ50cmを測る。南側にテラス状の段があり、南境式の鉢（第16図2、写真77—17）が出土している。底面の東寄りでピットと扁平な石が検出されている。

土壙群（第9図、写真24～31）

13層上面で検出された土壙は120数基で主に17～25ラインに分布している。土壙の平面形は円形と楕円形とに大別される。規模は径が0.6～1.5ｍ、深さが15～60cmと様々である。各土壙の堆積土中から土器片、土製品、石器が出土しているが、とくにＳＫ43、ＳＫ117からは丹塗りの土製耳飾り（写真78—15～17）が出土している。

ＳＫ24土壙（第14図1、写真64）　Ａ19グリッドに位置する。平面形は円形で径1.2ｍ、深

さ70cmを測る。堆積土は８層で、石鏃（写真78―25～29）などが出土しているほか、６層から深鉢が一括で出土している。

ＳＫ31土壙（第14図２、写真65）　Ｄ24・25グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で長軸1.5ｍ、短軸1.3ｍ、深さ50cmを測る。堆積土は11層である。

ＳＫ38土壙（第14図３、写真66）　ＢＣ―22グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で長軸1.5ｍ、短軸1.3ｍ、深さ60cmを測る。堆積土は17層で、15層から深鉢が一括で出土している。

ＳＫ87土壙（第14図４、写真67）　ＢＣ―23・24グリッドに位置し、９号配石の下部で検出されている。平面形は楕円形で長軸1.2ｍ、短軸0.7ｍ、深さ40cmを測る。堆積土は12層で、西半部に深鉢が埋設されていた。深鉢（第15図、写真77―16）は器高46.8cm、口径37.8cmと大型で南境式に比定されるものである。

埋設土器遺構（写真59～63）

Ｄ11、Ｂ16、Ｂ19、Ｅ20、Ｄ24グリッドの13層上面で５基検出されている。

遺物包含層（写真22、23）

11・12層から多量の縄文土器や石器などが出土している。11・12層は調査区のほぼ全域に堆積しているが、Ａ16・Ｂ17・Ｃ18・Ｄ19のグリッドより南側に多量の遺物が分布し、その範囲は土壙群が密に分布する範囲とほぼ一致している。出土した縄文土器は後期前葉の南境式のものがほとんどで、他に土偶、土錘、土製円盤などの土製品や石鏃、石錐、石匙などの石器や礫石器などが出土している（第16図１、写真77―18、写真78―15～35）。

Ｄ．奈良・平安時代の遺構と遺物

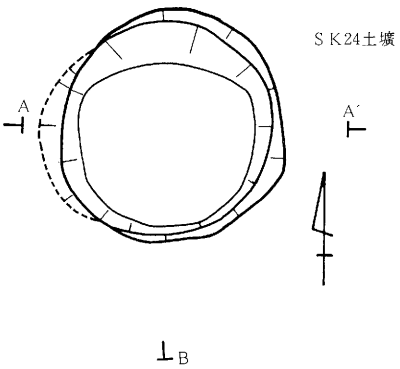
５層上面で奈良時代の住居跡５軒（ＳＩ１～５）、平安時代の住居跡３軒（ＳＩ７・８・10）が検出された（第９図、写真68）。住居跡は13～20ラインに集中している。

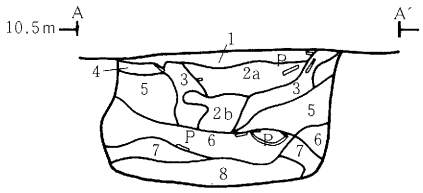
ＳＩ１住居跡（写真69）　南北４ｍ、東西４ｍの隅丸方形で、主軸方向はＮ―16°―Ｗである。壁は10～15cm残存し、床面は貼床で、カマドは北壁中央にある。周溝はほぼ全周し、主柱穴が３つ検出された。国分寺下層式の土師器坏や須恵器坏（写真77―８・９）が出土している。

ＳＩ２住居跡（写真70）　南北5.2ｍ、東西5.5ｍの隅丸方形で、主軸方向はＮ―11°―Ｗである。壁は20～25cm残存し、床面は貼床で、カマドは北壁中央にある。周溝は全周し、主柱穴が５つ検出された。国分寺下層式の土師器坏や須恵器坏（写真77―４・５）が出土している。ＳＩ３を切っている。

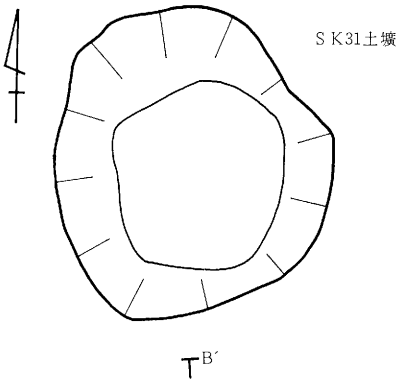
ＳＩ３住居跡（写真71）　南北3.8ｍ以上、東西4.2ｍの隅丸方形で、主軸方向はＮ―78°―Ｅである。壁は15～20cm残存し、床面は貼床で、カマドは東壁南寄りにある。周溝・主柱穴は不明である。国分寺下層式の土師器坏（写真77―２・３）が出土している。ＳＩ２に切られる。

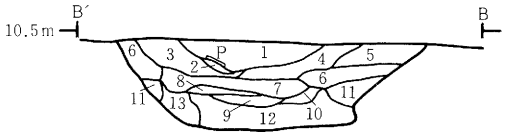
ＳＩ４住居跡（写真72）　南北4.1ｍ、東西4.7ｍの隅丸方形で、主軸方向はＮ―16°―Ｗで



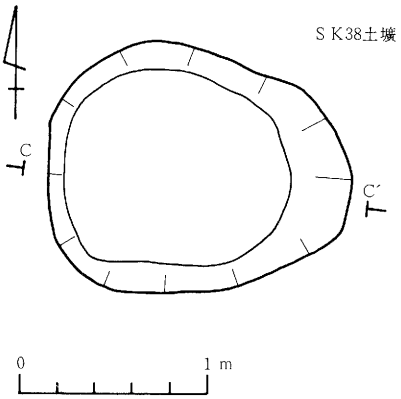


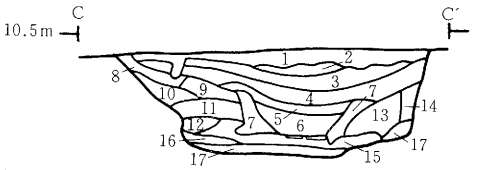
層No.	土色	土性	備考
1	10YR1/7 黒色	シルト質粘土	砂粒、パミス、マンガン、遺物混入
2a	7.5YR1/7 黒色	シルト質粘土	炭化物、パミス、マンガン、遺物混入
2b	7.5YR1/7 黒色	シルト質粘土	2a層よりやや明るい
3	7.5YR2/1 黒色	シルト質粘土	
4	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン混入
5	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	
6	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	黒色土を斑状に混入
7	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	
8	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	黒色土を斑状に混入



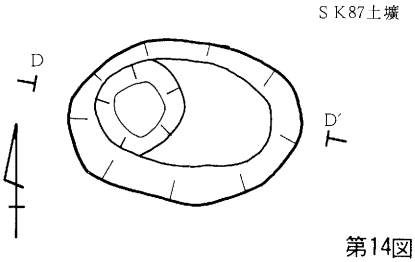


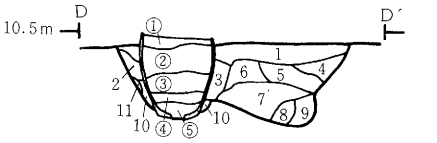
層No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭化物、砂粒、小礫混入
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
3	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	
4	7.5YR2/2 黒褐色	砂質シルト	炭化物、砂粒、小礫混入
5	7.5YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物混入
6	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	炭化物、砂粒、小礫混入
7	10YR2/1 黒色	シルト	
8	10YR3/4 褐色	シルト	暗褐色土混入
9	10YR2/3 黒褐色	粗砂	
10	10YR3/4 暗褐色	シルト	
11	10YR3/4 褐色	シルト	
12	10YR2/3 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土混入
13	10YR3/2 黒褐色	シルト	





層No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	
2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物混入
3	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	炭化物混入
4	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	
5	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	炭化物混入
6	10YR2/1 黒褐色	粘土質シルト	炭化物混入
7	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	
8	7.5YR2/3 黒褐色	砂質シルト	
9	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	
10	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	
11	2.5Y3/1 黒褐色	砂質シルト	
12	2.5Y3/2 黒褐色	砂質シルト	
13	2.5Y3/1 黒褐色	砂質シルト	
14	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	
15	2.5Y3/1 黒褐色	砂質シルト	炭化物混入
16	5Y3/1 オリーブ黒色	砂質シルト	炭化物混入
17	5Y3/2 オリーブ黒色	砂質シルト	





層No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	マンガン、パミス混入
2	10YR3/3 黒褐色	シルト質粘土	マンガン、パミス混入
3	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	マンガン、パミス混入
4	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	マンガン、パミス混入
5	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	マンガン、パミス、小礫混入
6	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	
7	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄混入
8	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	
9	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	
10	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
11	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	
①	10YR2/2 黒褐色	シルト	マンガン、パミス混入
②	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	
③	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	
④	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	
⑤	10YR3/1 褐灰色	粘土質シルト	

第14図　SK24・31・38・87土壙

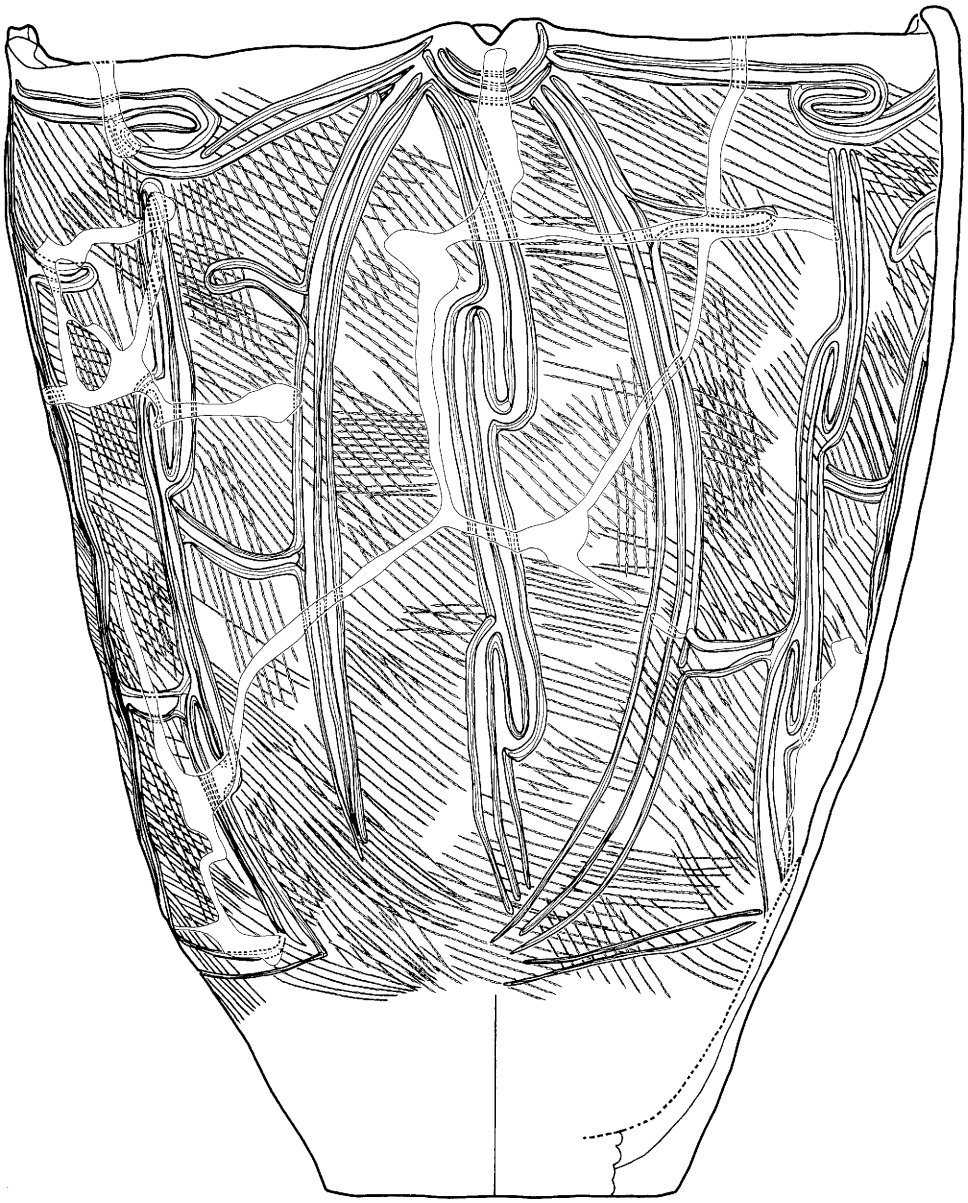
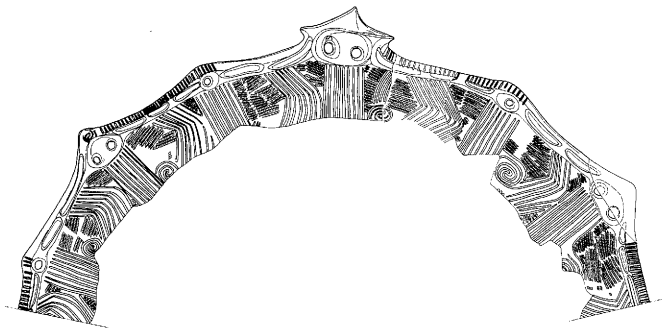
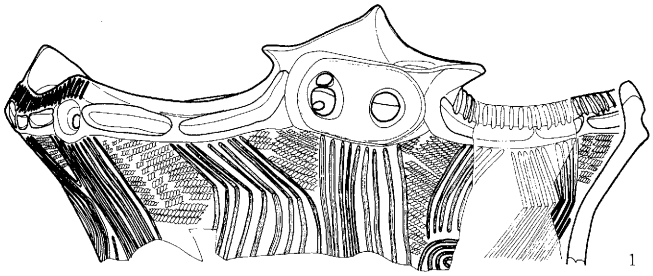


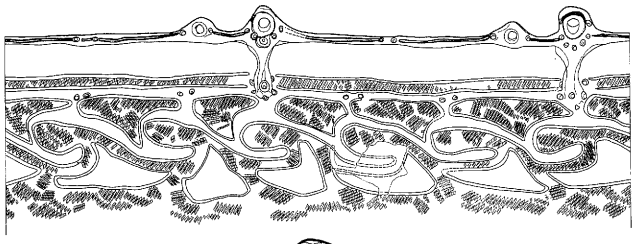
図	遺構・層位	器　形	口径cm	器高cm	文　様　の　特　徴
1	ＳＫ87土壙	深　鉢	37.8	46.8	多条沈線、孤状・連鎖下垂文、撚糸文R

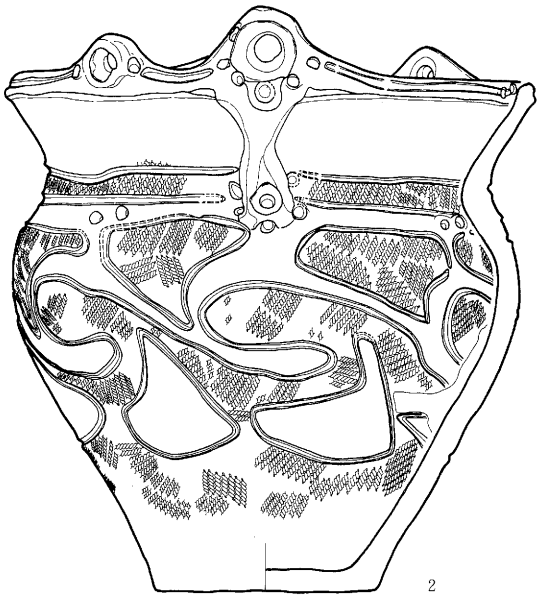
第15図　出土遺物(2)(縮尺1/3)





1





2

図	遺構・層位	器　形	口径cm	器高cm	文　様　の　特　徴
1	B11区・12層	深　鉢	24.0	——	多条沈線、渦・下垂・孤状文、縄文ＬＲ
2	8号配石土壙	鉢	21.2	20.8	入組渦文、充塡縄文ＬＲ

第16図　出土遺物(3)(縮尺1/3、展開図適宜)

ある。壁は25cm残存し、床面は貼床で、カマドは北壁東寄りにある。周溝は東北隅に一部検出された。主柱穴は不明だが壁柱穴を８つ確認している。国分寺下層式の土師器坏と須恵器坏（写真77―６・７）が出土している。ＳＩ５を切っている。

ＳＩ５住居跡（写真73）　南北５ｍ、東西５ｍの隅丸方形で、主軸方向はＮ―18°―Ｗである。壁は20cm残存し、床面は貼床で、カマドは北壁中央にある。周溝はほぼ全周し、主柱穴は４つである。国分寺下層式の土師器坏、鉢（写真77―１・13）が出土している。ＳＩ４に切られる。

ＳＩ７住居跡（写真74）　南北4.2ｍ、東西４ｍ以上の隅丸方形で、推定主軸方向Ｎ―78°―Ｗである。遺存状況は悪く東半の床面は削平をうけている。壁は２～６cm残存し、カマドは焼土の分布から東壁南寄りの位置に推定される。主柱穴は３つ確認されている。ロクロ使用の土師器甕・須恵器坏（写真77―11、14）が出土している。ＳＩ８に切られ、ＳＩ10を切っている。

ＳＩ８住居跡（写真76）　南北推定5.4ｍ、東西４ｍの隅丸方形で、主軸方向Ｎ―78°―Ｗである。壁や床面はほとんど削平されているが、東壁中央にあるカマドと４つの主柱穴は確認されている。ロクロ使用の土師器坏・甑（写真77―12・15）が出土している。ＳＩ５とＳＩ７を切っている。

ＳＩ10住居跡（写真75）　南北2.7ｍ、東西2.5ｍの隅丸方形で、主軸方向Ｎ―88°―Ｗである。壁は10～15cm残存し、床面は貼床で、カマドは東壁南寄りにある。周溝・主柱穴は不明である。ロクロ使用の土師器坏（写真77―10）が出土している。ＳＩ７に切られる。

４．まとめ

・下ノ内浦遺跡は、縄文時代早期前葉・後期前葉、弥生、奈良、平安時代にかけての人間の活動した痕跡が地表下約４ｍにわたる土層に刻みこまれた遺跡である。

・縄文時代早期前葉の遺物として押型文土器が確認されている。それらは日計式と呼ばれるものである。

・縄文時代早期前葉の遺構として、住居跡の可能性も考えられる竪穴遺構２基、所謂陥し穴遺構の１類型に類似したものを含む土壙７基が検出された。

・縄文時代後期前葉の南境式期の遺物が多量にまとまって出土している。

・縄文時代後期の配石遺構は、下部の土壙のあり方、遺物の出土状況などから墓である可能性が高いと考えられる。同時に確認されている土壙群なども墓制に深く関わる遺構群と考えられる。それらは南境式期に属するものである。

・弥生時代後期の遺物包含層と畦畔状の遺構が検出されている。

・奈良時代（国分寺下層式期）、平安時代（表杉ノ入式期）の住居跡が８軒検出されている。

注

注１）　概報Ⅲ（仙教委　1984　第69集）では基本層が20層であるが、本報告が優先する。
注２）　写真78―６は黒曜石製の局部磨製の石鏃である。日計式土器と共伴する数少ない例である。

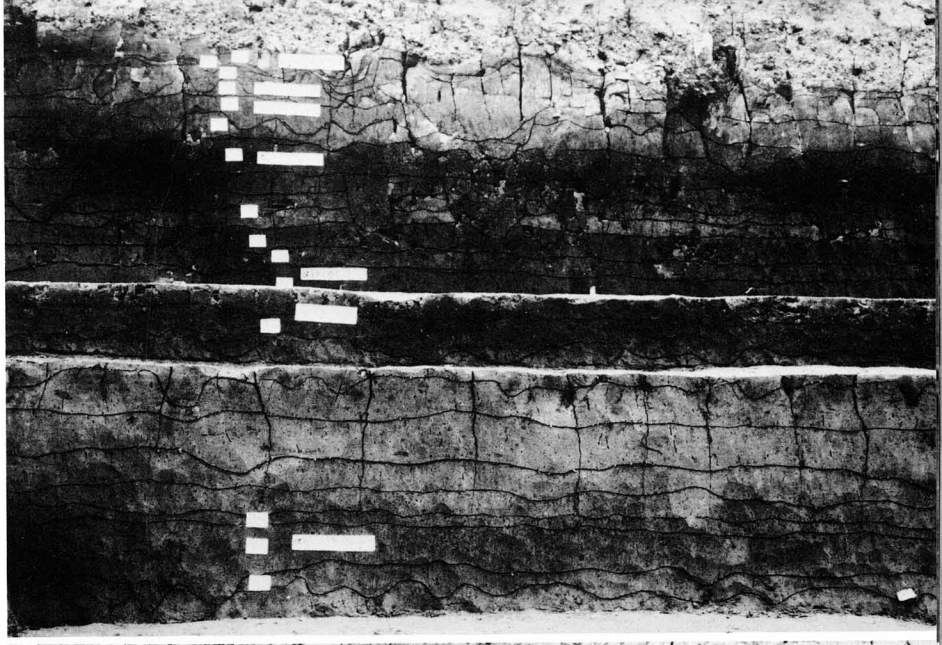


写真17　A—10・11区断面

写真18　S I 10・S I 11 竪穴遺構

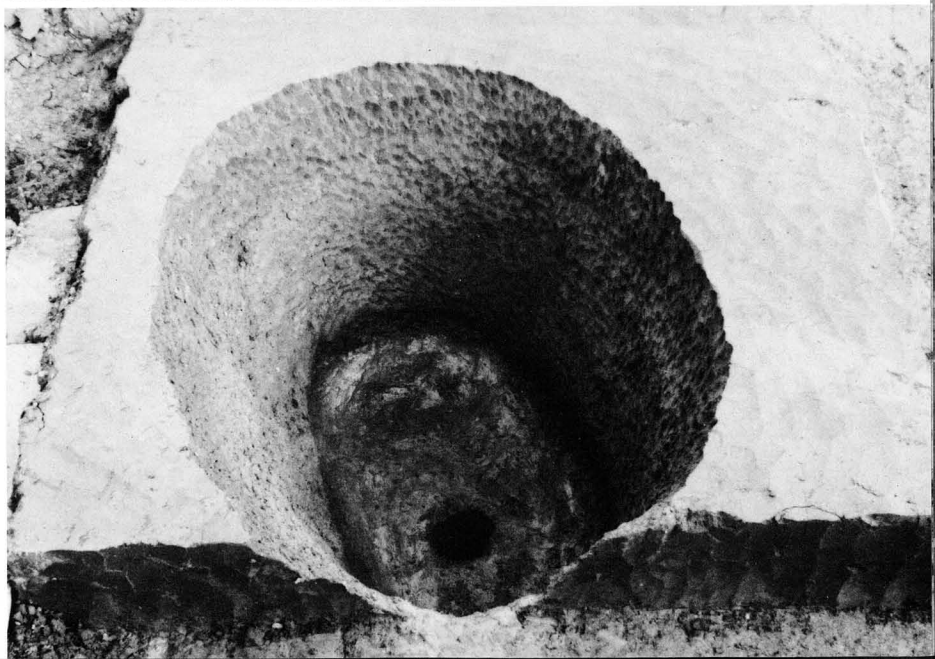


写真19　S K 140土壙

写真20　ＳＫ９土壙

写真21　尖頭器出土状況

写真22　11層遺物出土状況

写真23　12層遺物出土状況

写真24　13層配石・土壙群　（南→北）

写真25　13層配石・土壙群　（南→北）

写真26　13層配石・土壙群
(西→東)

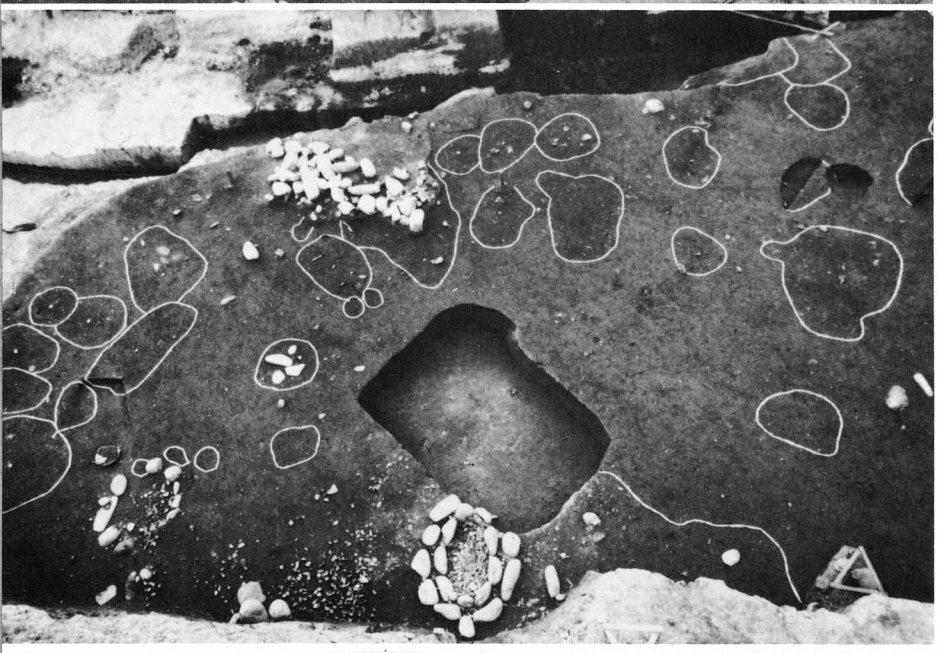


写真27　13層配石・土壙群
(東→西)

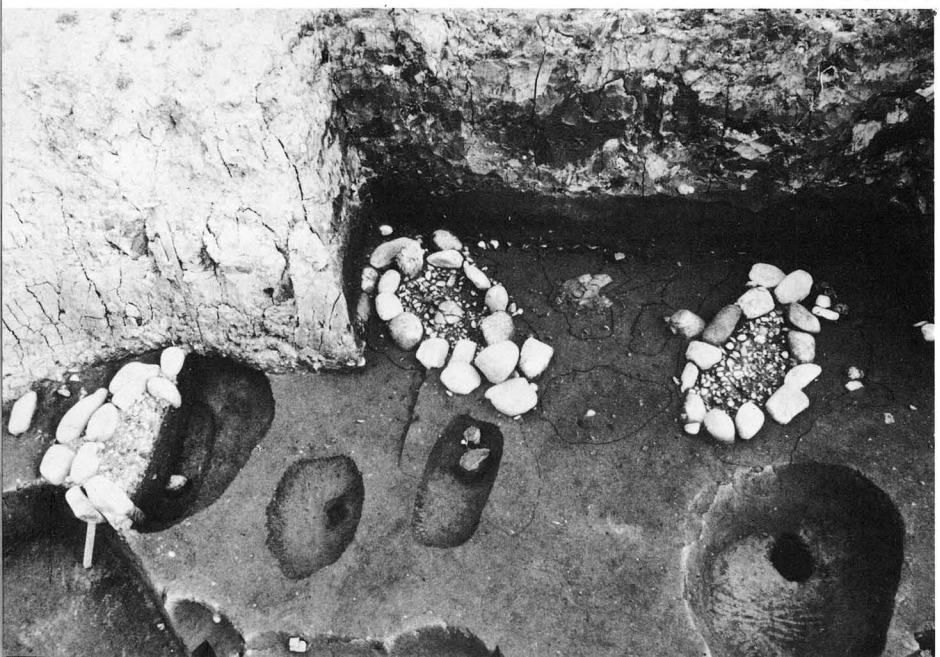


写真28　1・6～8号配石

写真29　13層配石・土壙群　（西→東）

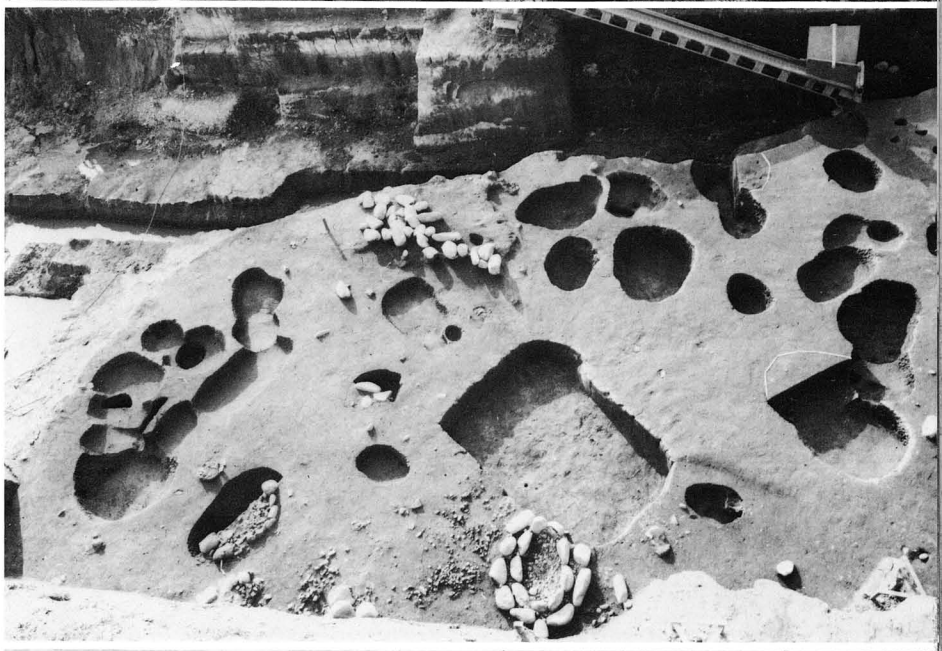


写真30　13層配石・土壙群　（東→西）

写真31　1・6～8号配石下の土壙

写真32　2～5号配石

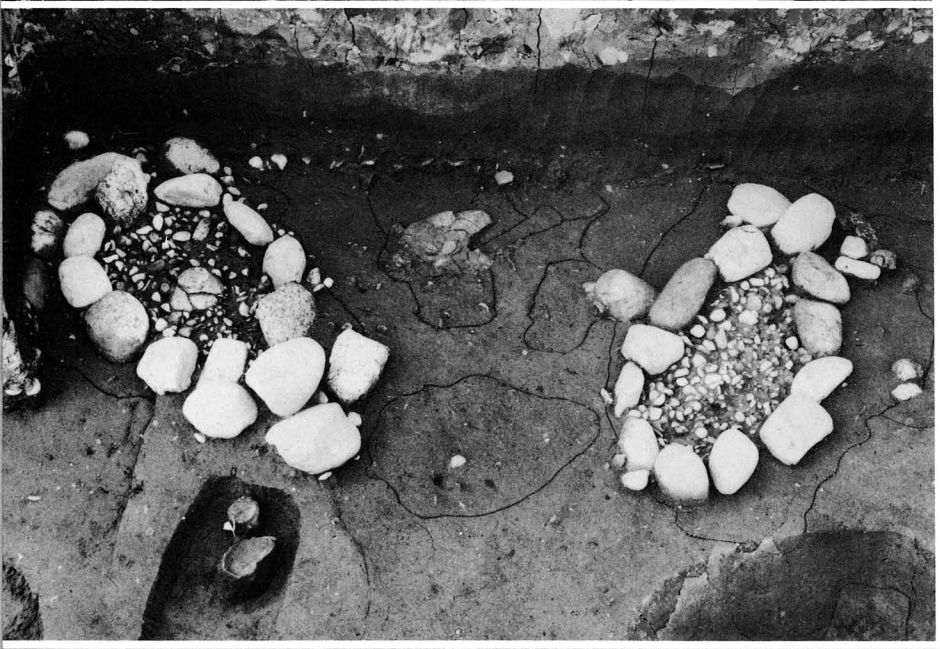


写真33　6・8号配石

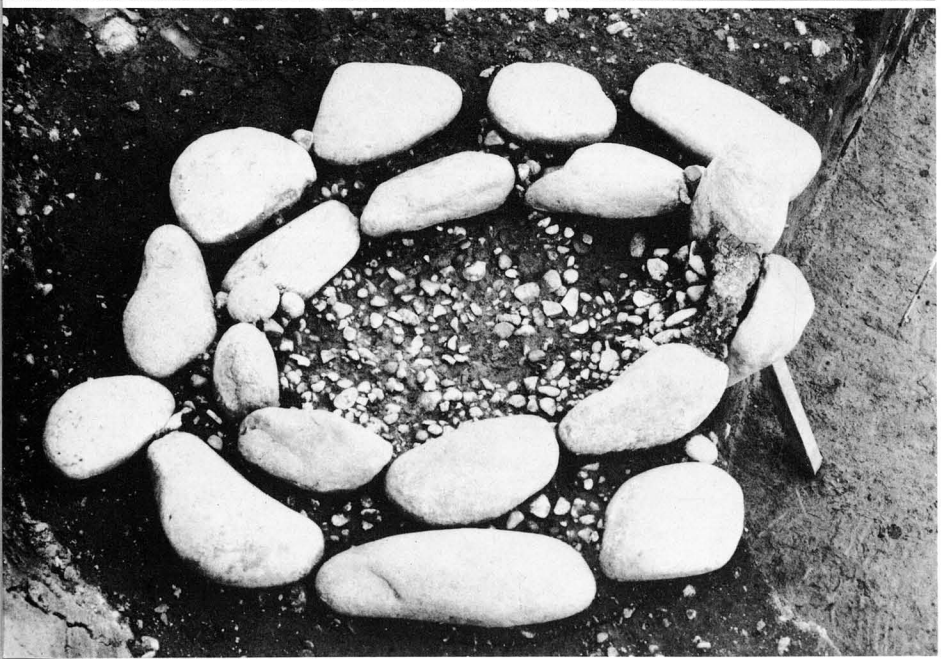


写真34　1号配石

写真35　1号配石

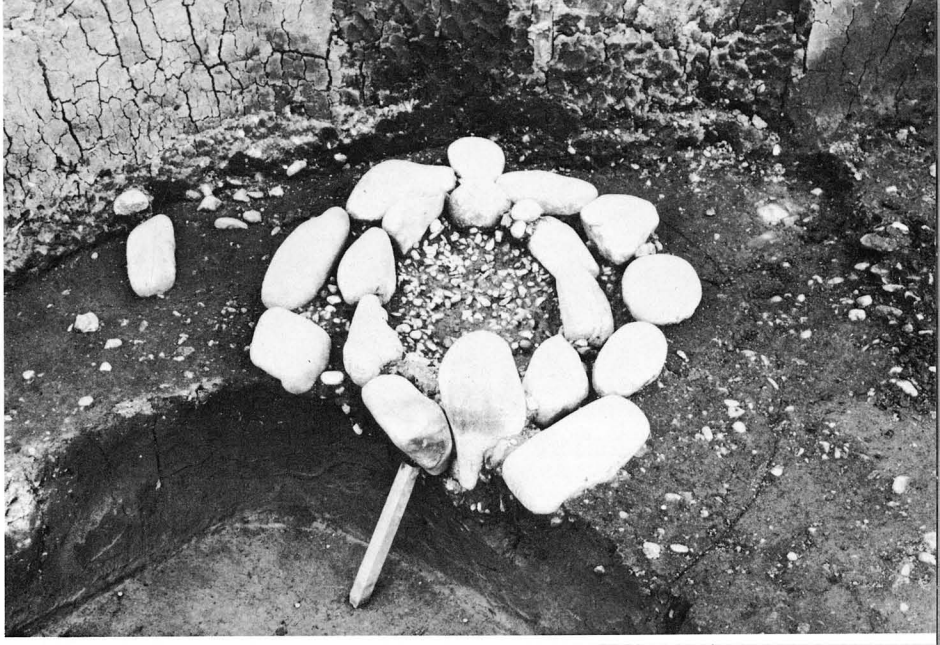


写真36　1号配石

写真37　1号配石の土壙

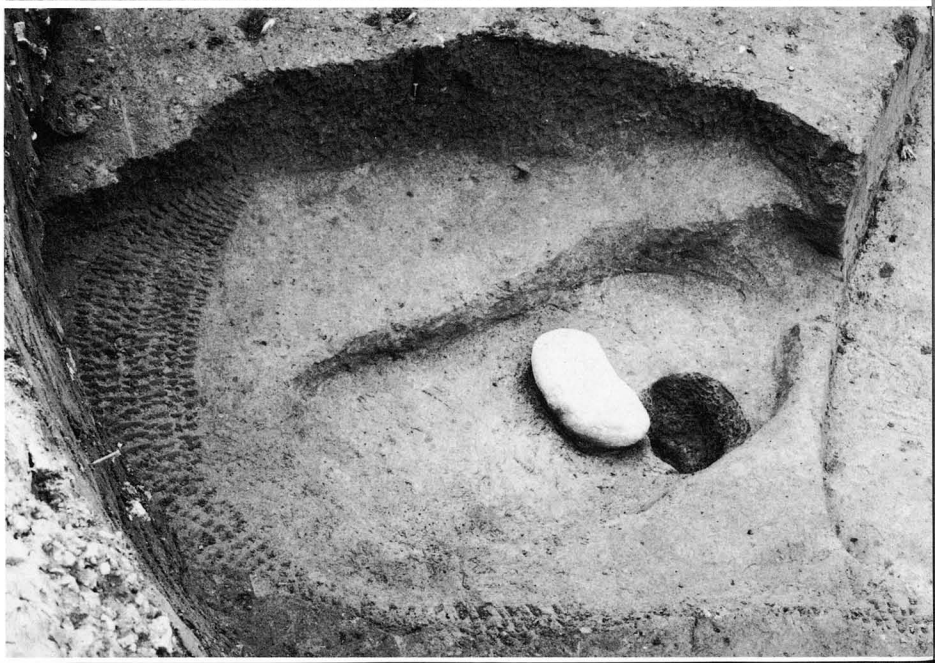


写真38　１号配石の土壙
内出土の耳飾り

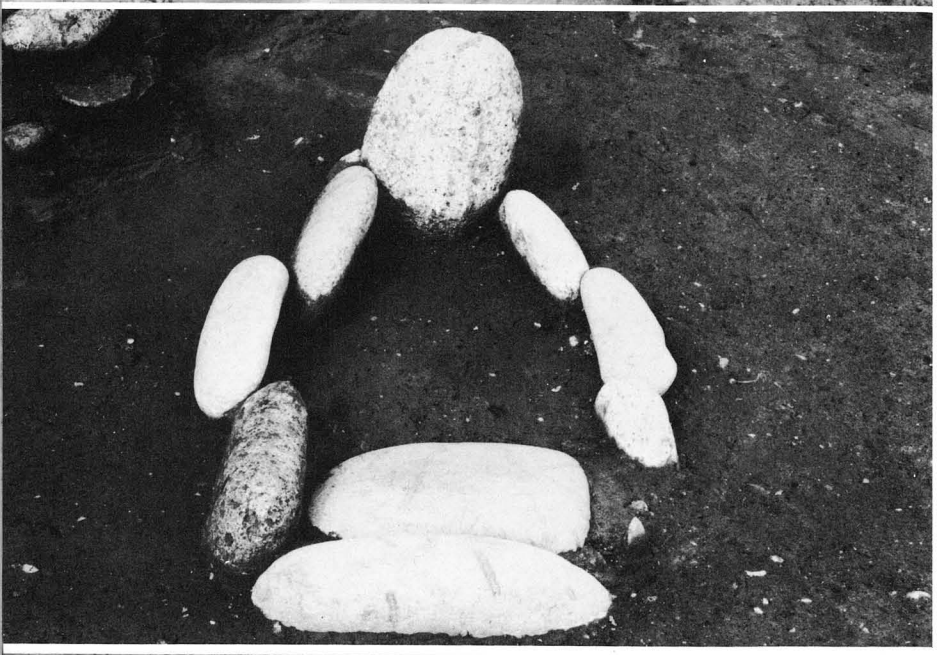


写真39　２号配石

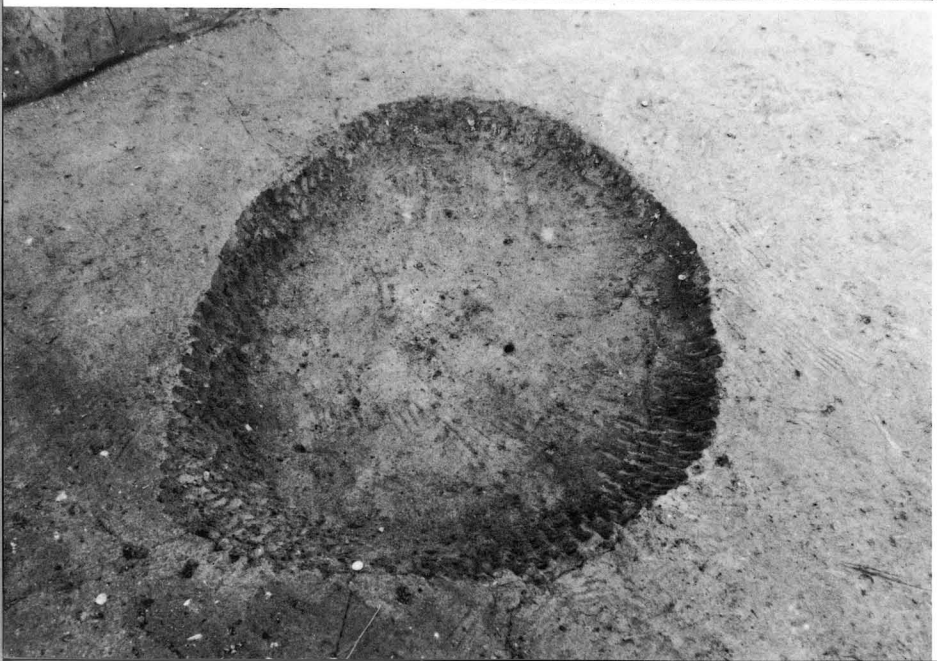


写真40　２号配石の土壙

写真41　３号配石

写真42　３号配石の土壙

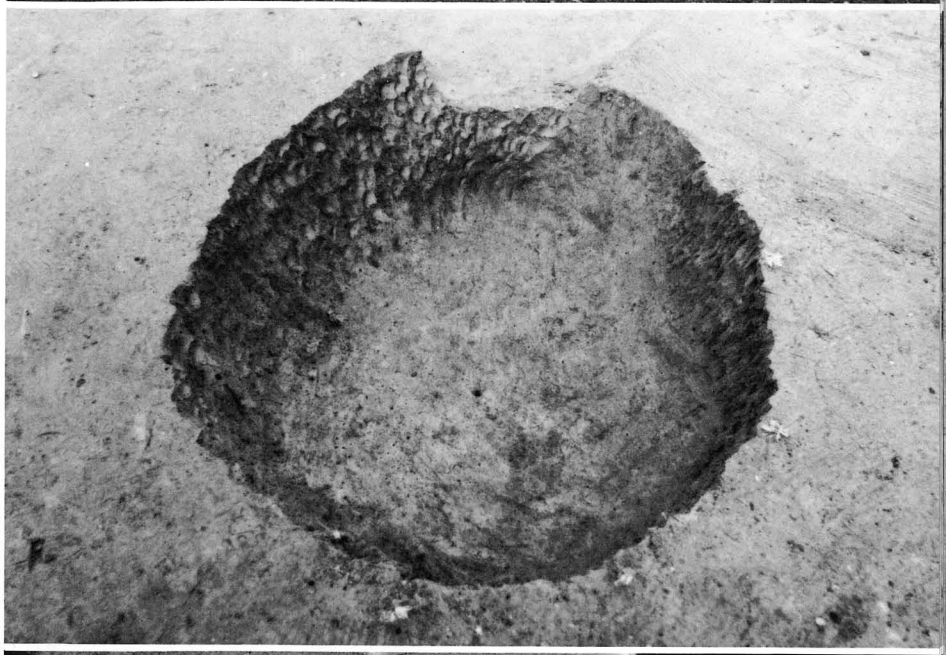


写真43　４号配石

写真44　４号配石の土壙

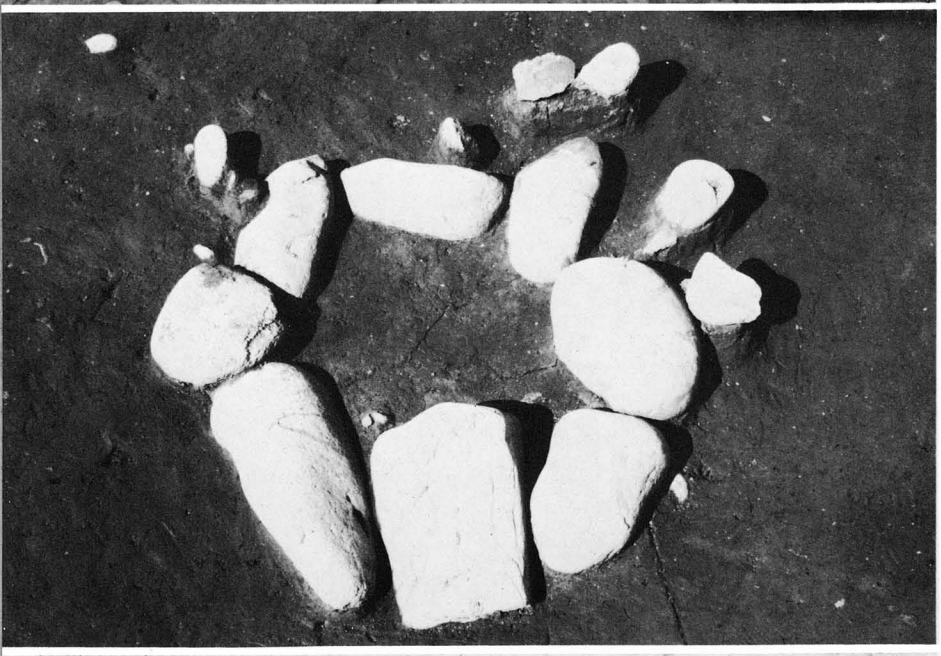


写真45　５号配石

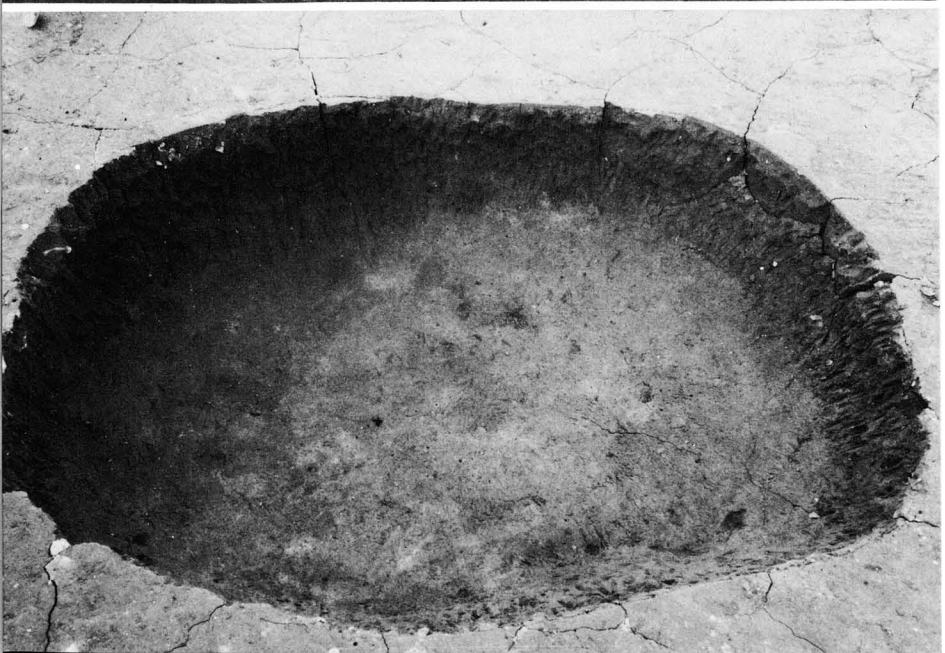


写真46　５号配石の土壙

写真47　６号配石

写真48　６号配石

写真49　６号配石の土壙

写真50　７号配石

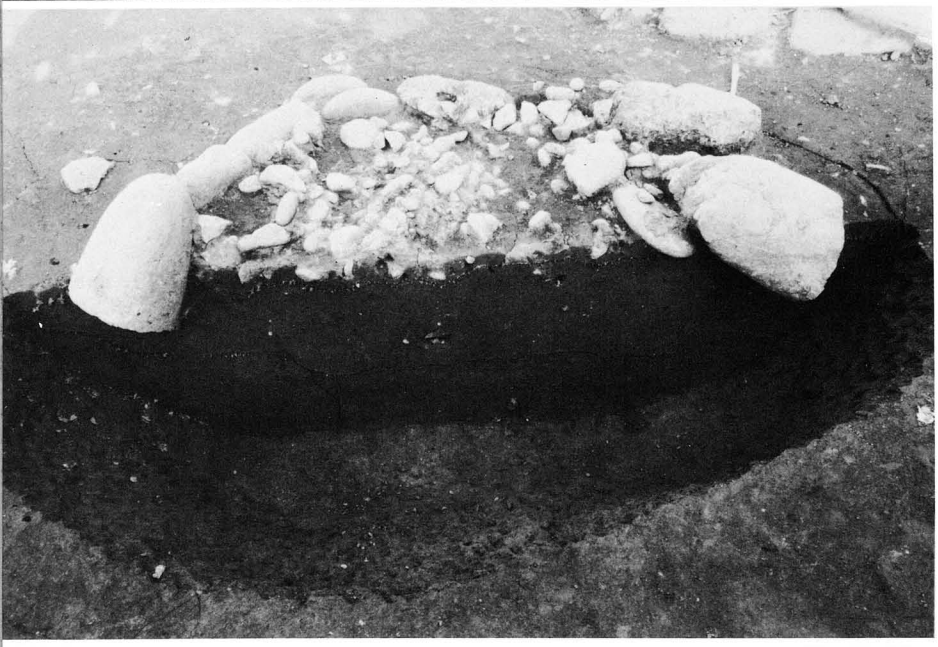


写真51　７号配石

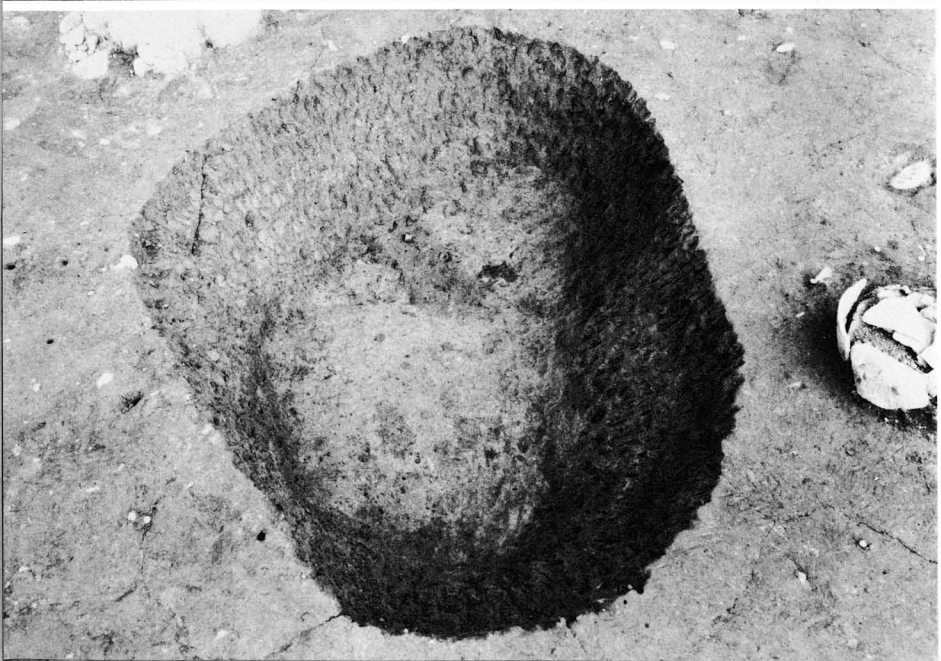


写真52　７号配石の土壙

写真53　７号配石の土壙
内出土の耳飾り

写真54　８号配石

写真55　８号配石

写真56　８号配石の土壙

写真57　８号配石出土の鉢

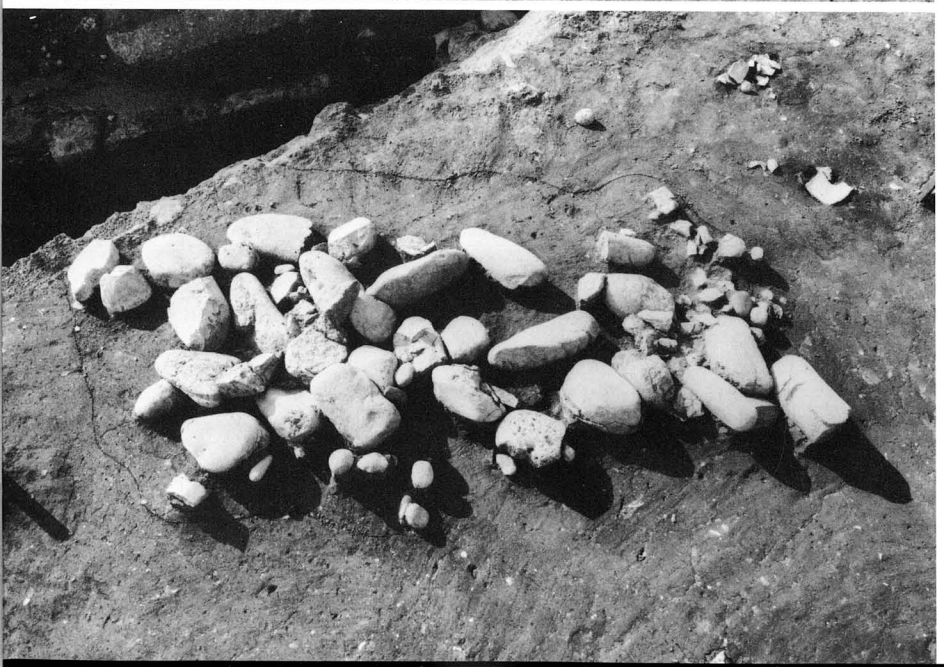


写真58　９号配石

写真59　１号埋設土器

写真60　２号埋設土器

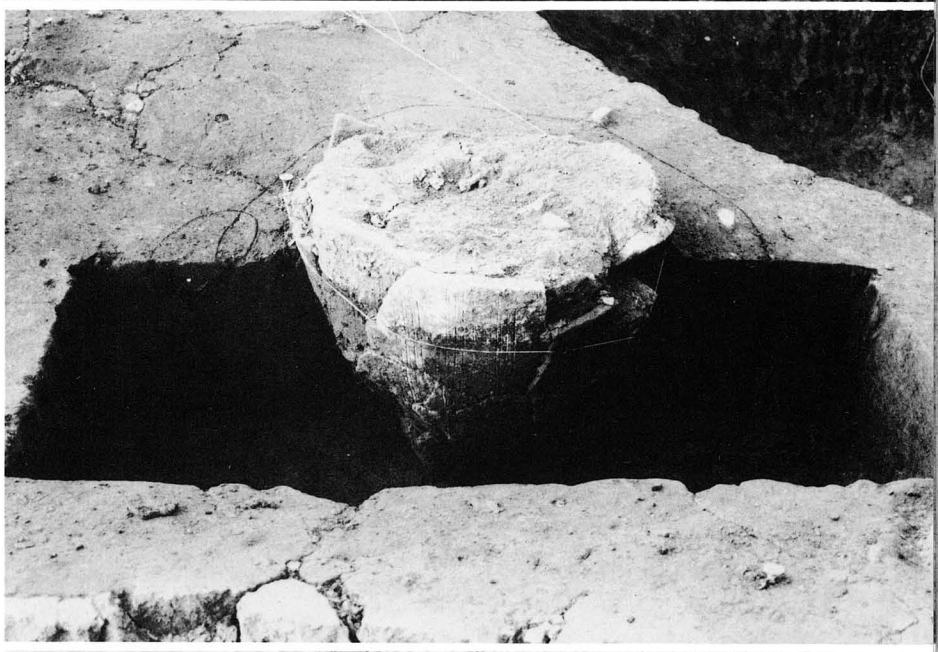


写真61　３号埋設土器

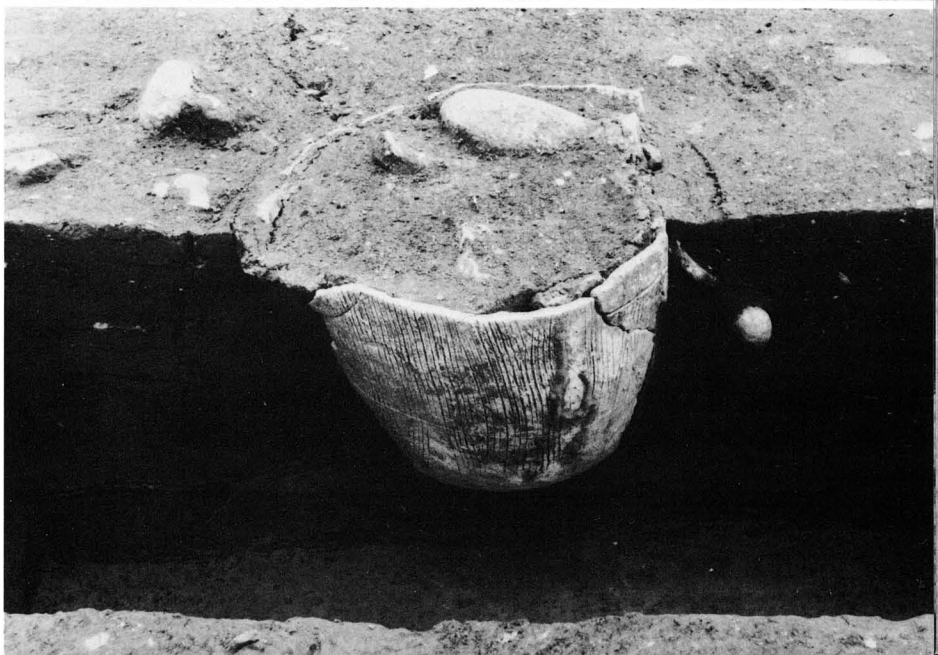


写真62　４号埋設土器

写真63　５号埋設土器

写真64　ＳＫ24土壙

写真65　ＳＫ31土壙

写真66　ＳＫ38土壙

写真67　ＳＫ87土壙

写真68　５層全景
（北→南）

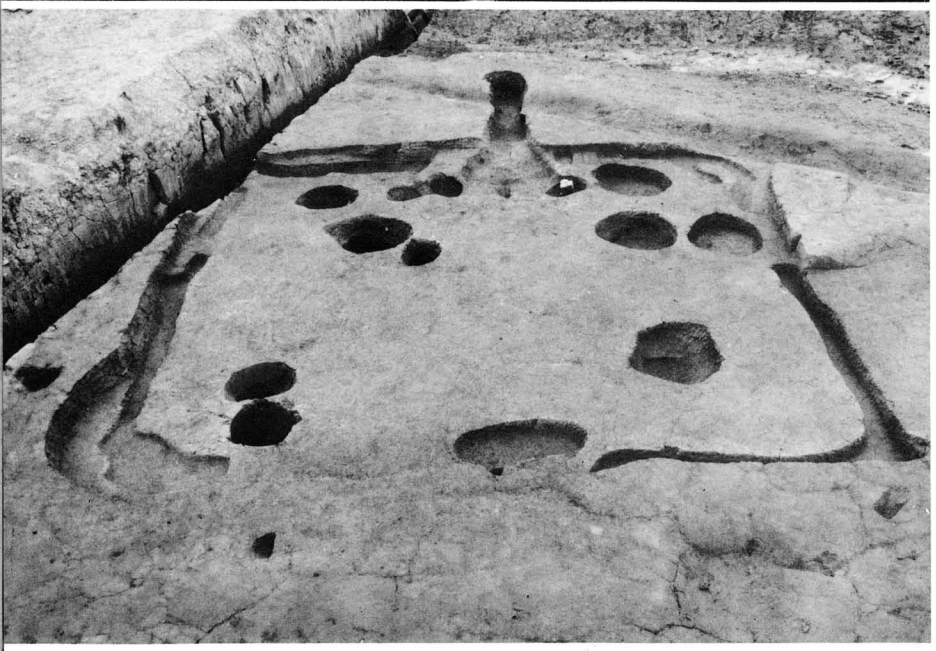


写真69　ＳＩ１住居跡

写真70　ＳＩ２住居跡

写真71　ＳＩ３住居跡

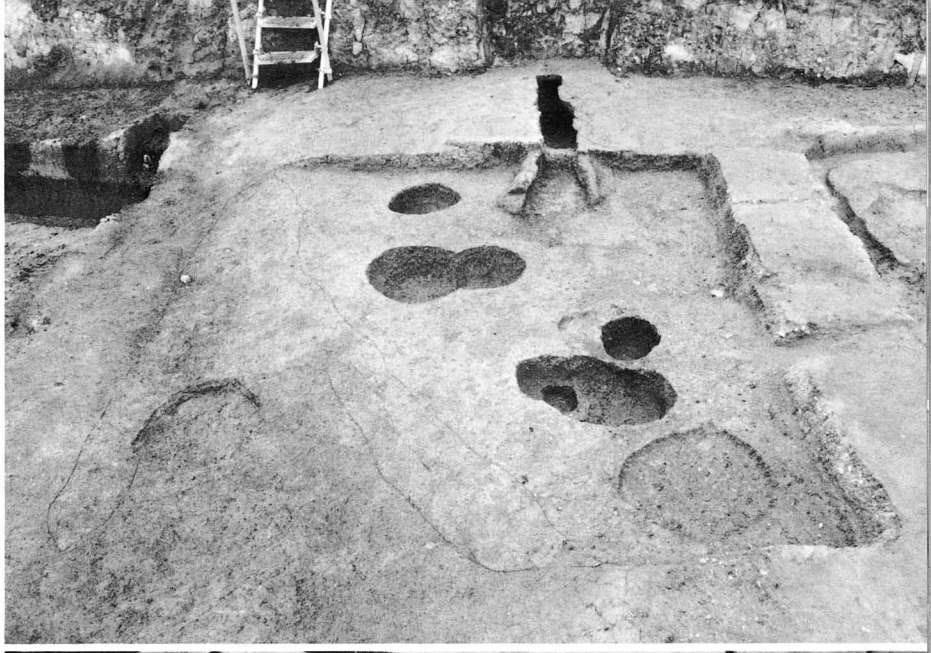


写真72　ＳＩ４住居跡

写真73　ＳＩ５住居跡

写真74　ＳＩ７住居跡

写真75　ＳＩ10住居跡

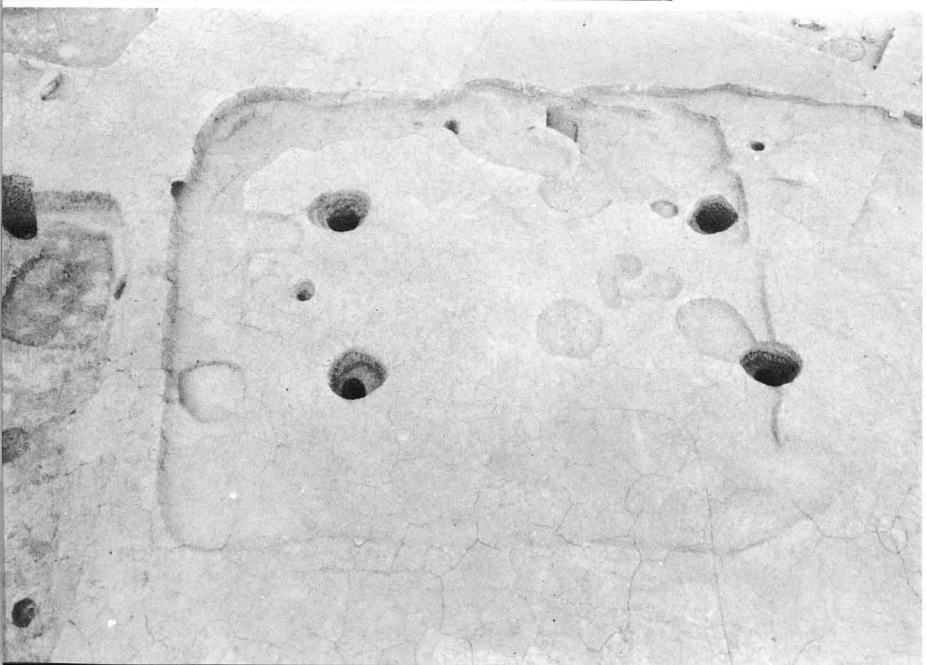
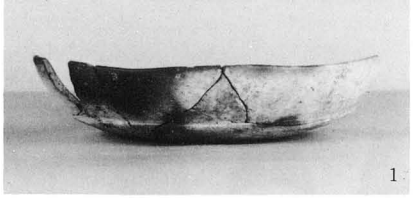
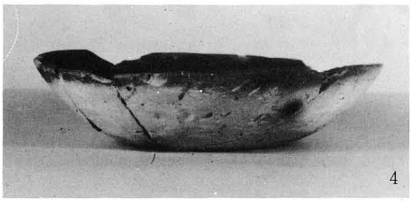
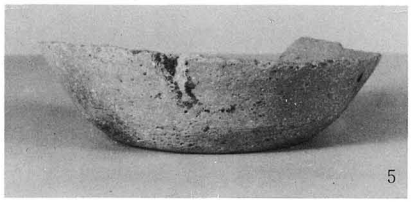
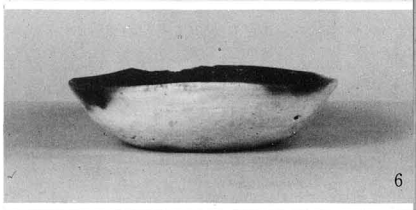


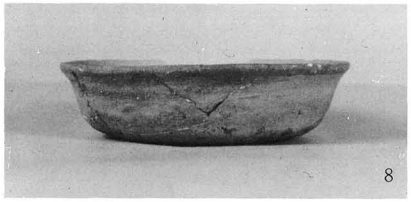
写真76　ＳＩ８住居跡

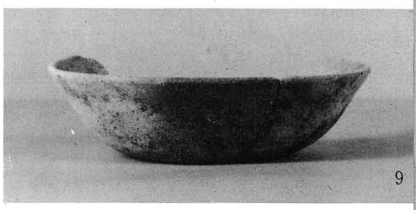


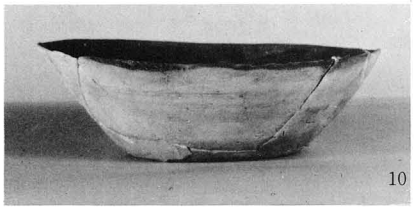


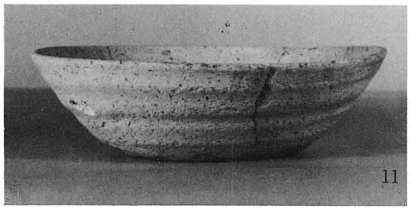


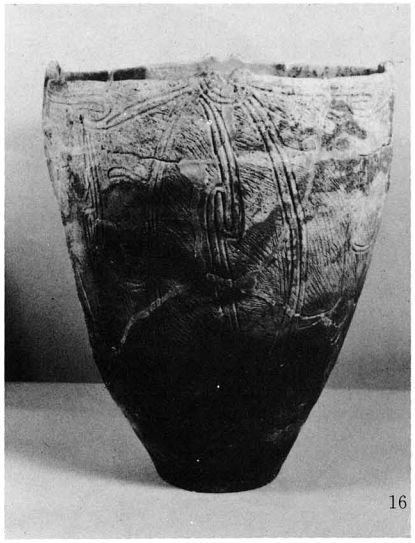


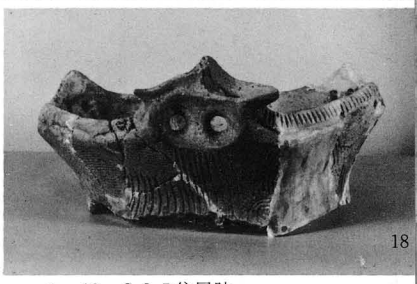








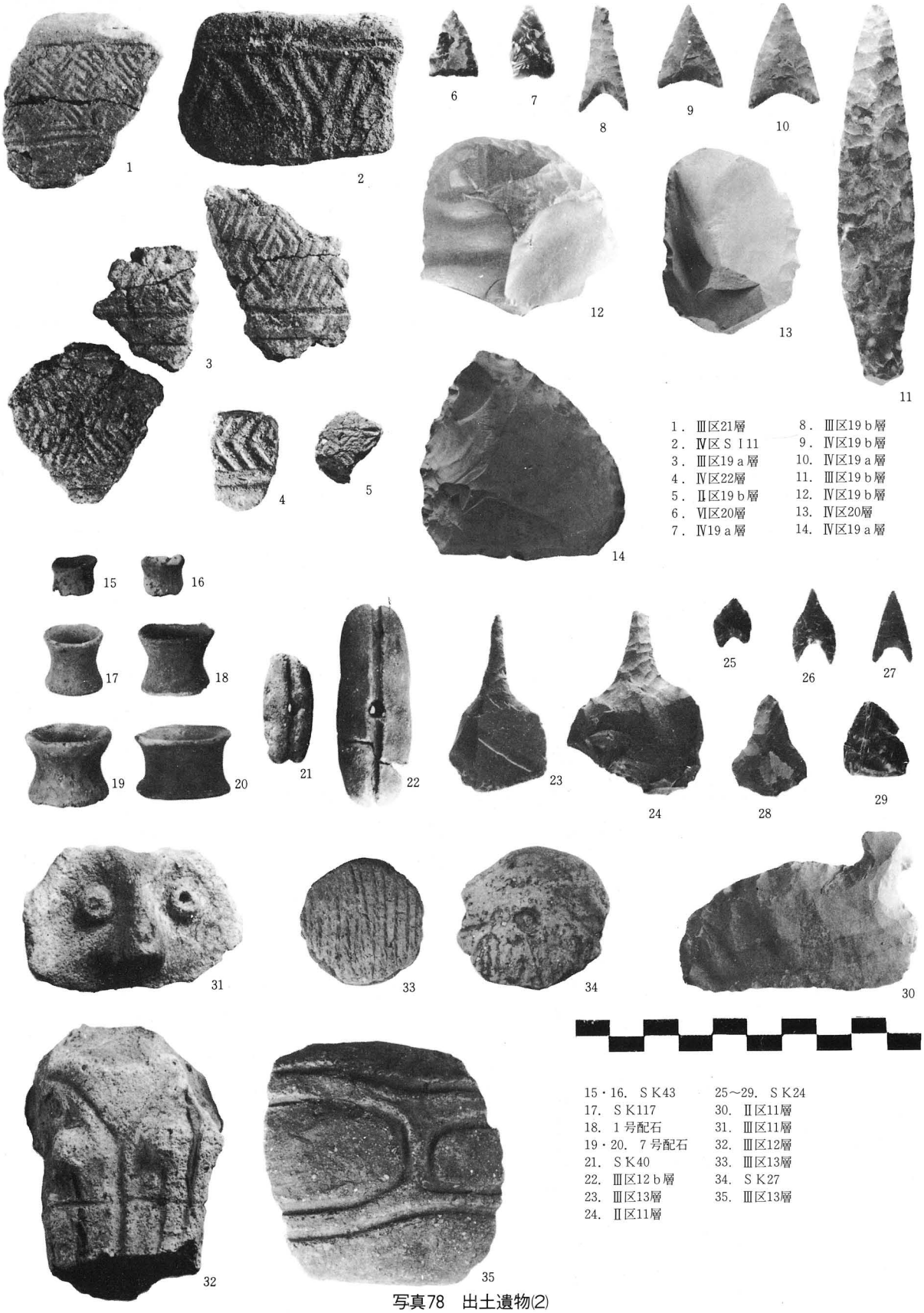




1．13．ＳＩ５住居跡
2．3．ＳＩ３住居跡
4．5．ＳＩ２住居跡
6．7．ＳＩ４住居跡
8．9．ＳＩ１住居跡
10．　ＳＩ10住居跡
11．14．ＳＩ７住居跡
12．15．ＳＩ８住居跡

16．ＳＫ87土壙
17．８号配石
18．Ⅱ区12層

写真77　出土遺物(1)



1．Ⅲ区21層
2．Ⅳ区ＳＩ11
3．Ⅲ区19ａ層
4．Ⅳ区22層
5．Ⅱ区19ｂ層
6．Ⅵ区20層
7．Ⅳ19ａ層
8．Ⅲ区19ｂ層
9．Ⅳ区19ｂ層
10．Ⅳ区19ａ層
11．Ⅲ区19ｂ層
12．Ⅳ区19ｂ層
13．Ⅳ区20層
14．Ⅳ区19ａ層

15・16．ＳＫ43
17．ＳＫ117
18．１号配石
19・20．７号配石
21．ＳＫ40
22．Ⅲ区12ｂ層
23．Ⅲ区13層
24．Ⅱ区11層
25～29．ＳＫ24
30．Ⅱ区11層
31．Ⅲ区11層
32．Ⅲ区12層
33．Ⅲ区13層
34．ＳＫ27
35．Ⅲ区13層

写真78　出土遺物(2)

Ⅵ．富沢水田遺跡（C－301）鳥居原地区

1．遺跡の立地

富沢水田遺跡鳥居原地区は、東北本線長町駅の西方約750m に位置し、主に名取川と広瀬川によって形成された後背湿地に立地している。調査対象区域は仙台市高速鉄道南北線の鍋田変電所部分であり、面積は670㎡である。

2．層　位

基本層位は１層から14層まで細分層を含め17層確認された。１層は旧耕作土、２層シルト層、３～５層は粘土層、６層以下は泥炭層(注)である。

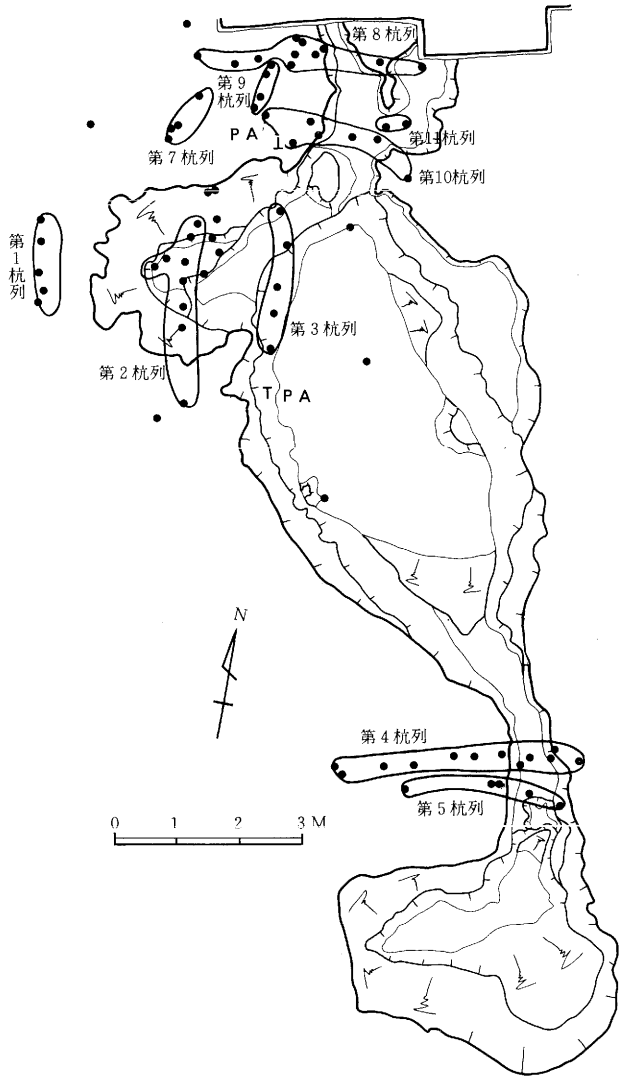
3．調査の概要

今回の調査では２層、３層、４層、11層、12層の各層上面で水田跡が検出された。また6ａ層上面からは杭列を伴う落ち込みが検出された。

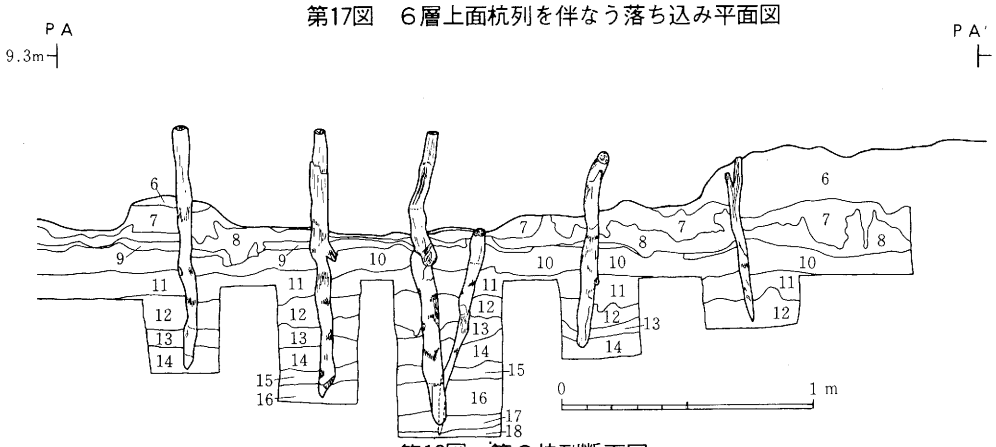
３層上面と４層上面で検出された水田跡は層中に灰白色火山灰を部分的に含み、表杉ノ入式の土師器片を出土することから、平安時代の水田跡である。２時期にわたるこの水田跡は共に明瞭な酸化鉄の集積層が形成されていないことから、湿田に近いものと考えられる。また区画は捉えられなかったが、南北方向の畦畔はほぼ真北方向を向く傾向がある。12層上面の水田跡は泥炭質の粘土層を作土とする湿田である。水田の構造は真北に対し東に約30度、及び西に約60度ふれた方向の大畦を基軸とし、大畦と大畦とに囲まれた中に小畦により水田を作っており、水田の規模は今回の調査では12㎡前後である。この水田跡は隣接する高速鉄道南北線長町南駅部分で検出された弥生時代中期の水田跡(注)と層位が対応し、構造も同様であり、同一時期のものである。また、11層上面で検出された水田跡は、畦畔の方向性が12層の水田跡とほぼ同じであり、大畦は12層の大畦を覆った11層の高まりをそのまま使っていることから、12層の水田跡に直接後続する弥生時代の水田跡と考えられる。この11層と12層の２時期の水田跡は、当地区において弥生時代に水田が連続して作られていたことを示しており、水田耕作の定着を物語る。

さて、今回の調査では、弥生時代２時期、平安時代２時期の水田跡が検出されたわけであるが、6ｂ層、７層といった層からも水田跡の検出される可能性がある。特に７層は隣接する長町南駅部分の５層に対応し、花粉分析、プラントオパール分析、土壌分析の結果や、層中から木製農耕具（鋤）(注)や石包丁が出土していることなどから水田跡の存在が考えられており、今後の調査により水田跡の時期的な構造が明確になるであろう。また水田耕作の実態についても集落との関係やイネ以外の作物を考慮し、種々の分析及び同定法を活用しながら調査を行なう必要がある。

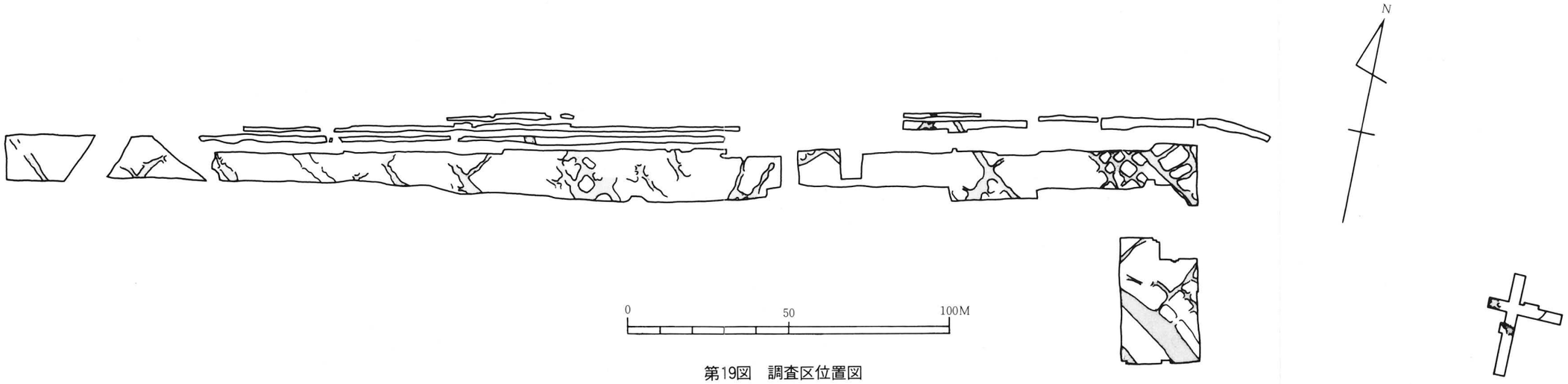
注）　荒井　格　1984「富沢水田遺跡鳥居原・中谷地地区」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』仙台市文化財調査報告集第69集



第17図　６層上面杭列を伴なう落ち込み平面図

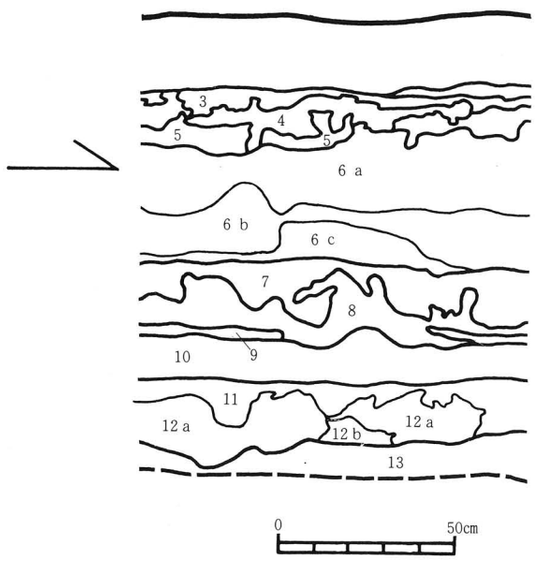


第18図　第３杭列断面図



第19図　調査区位置図

写真79　東壁断面



第20図　東壁断面図

土　層　注　記

1層：10YR4/1褐灰色シルト。しまりややあり。粘性なし。旧耕作土。

2層：7.5YR4/1シルト質粘土。しまりなし。粘性あり。最上部には酸化鉄の集積層がみられる。

3層：10YR3/1黒褐色粘土。しまりなし。粘性あり。平安時代水田耕作土。縦に酸化鉄斑がみられる。部分的に灰白色火山灰をブロック状に含む。

4層：10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土。しまりなし。粘性ややあり。平安時代水田耕作土。縦に酸化鉄斑がみられる。部分的に灰白色火山灰をブロック状に含む。

5層：10YR3/1黒褐色粘土。しまりなし。粘性あり。酸化鉄斑がみられる。

6a層：10YR3/2黒褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。10YR6/2灰黄褐色粘土と互層になる。縦の細かな酸化鉄斑がみられる。

6b層：10YR3/3暗褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。縦の細かな酸化鉄斑がみられる。

6c層：5Y6/2灰オリーブ色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。部分的に10YR3/2黒褐色粘土と互層になる。縦の細かな酸化鉄斑がみられる。

7層：2.5Y5/2暗灰黄色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。酸化鉄斑が部分的にみられる。

8層：7.5YR3/2黒褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。5Y6/2灰オリーブ粘土と互層になる。

9層：5Y6/1灰色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。

10層：10YR3/1黒色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。10YR4/2灰黄褐色粘土と互層になる。

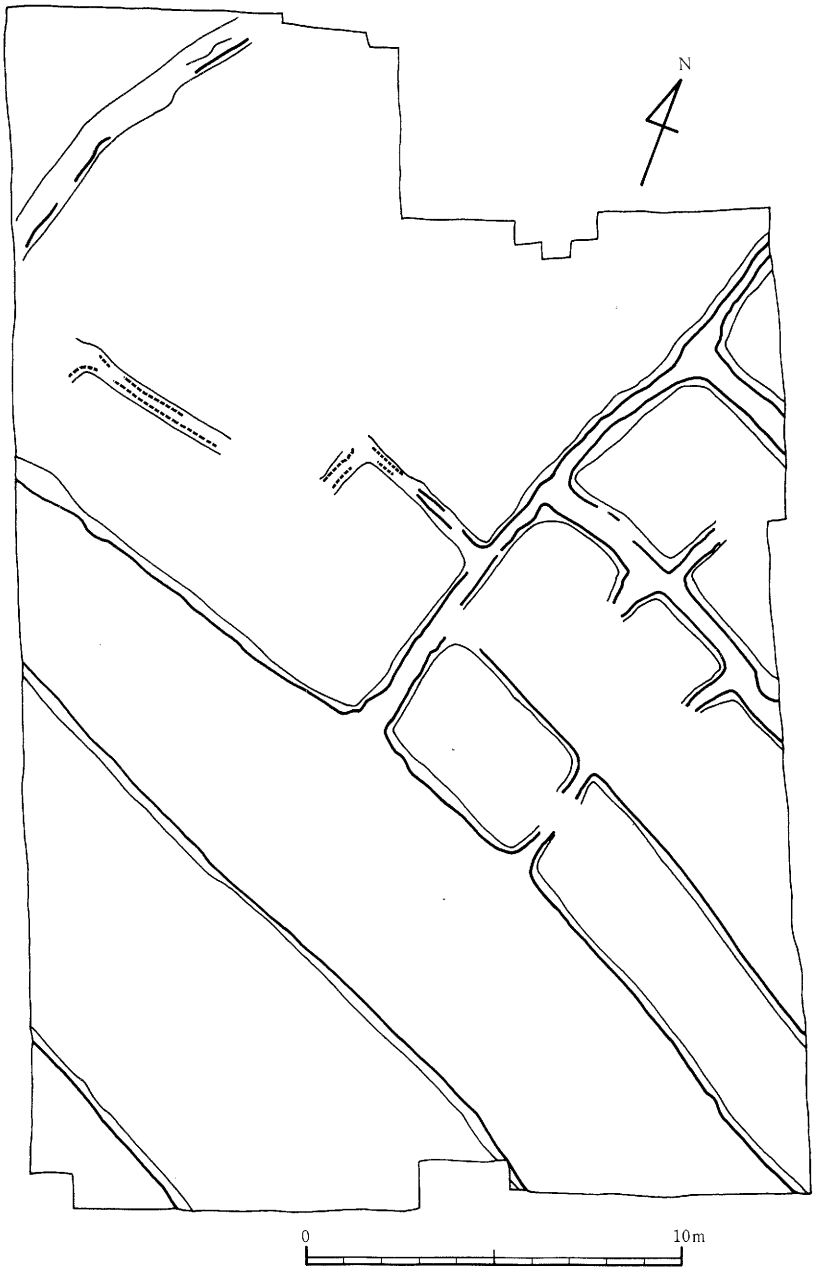
11層：10YR5/2灰黄褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。弥生時代水田耕作土。

12a層：10YR4/1褐灰色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。部分的に12b層をブロック状に含む。弥生時代水田耕作土。

12b層：10YR3/2黒褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。2.5Y6/2灰黄色粘土と互層になる。この層は大畦の下には明瞭に残存するが、他の部分においては多くはみられない。

13層：2.5Y6/1黄灰色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。

14層：10YR3/1黒色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。



第21図　12層上面平面図

写真80　６層上面落ち込み全景

写真81　11層上面全景

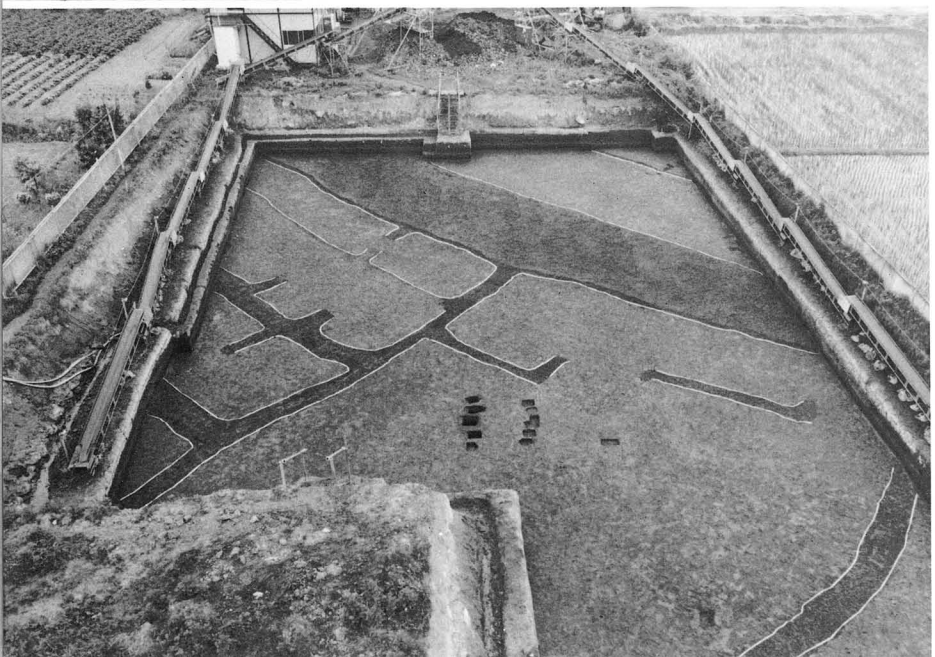


写真82　12層上面全景

職　員　録

社会教育課

課　長	阿部　達
主　幹	早坂春一

文化財管理係

係　長	佐藤政美
主　事	岩沢克輔
〃	山口　宏

文化財調査係

係　長	佐藤　隆	主　事	吉岡恭平
主　事	田中　則和	〃	工藤哲司
〃	結城　慎一	〃	渡部弘美
教　諭	菅原　和夫	教　諭	渡辺　誠
主　事	木村　浩二	主　事	主浜光朗
〃	篠原　信彦	〃	斎野裕彦
教　諭	小野寺和幸	〃	長島栄一
〃	佐藤美智雄	〃	及川　格
主　事	佐藤　洋	教　諭	千葉　仁
〃	金森　安孝	〃	松本清一
〃	佐藤　甲二	派遣職員	高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
第２集　仙台城（昭和42年３月）
第３集　仙台市燕沢善応寺横沢穴古墳群調査報告書（昭和43年３月）
第４集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年３月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし（昭和54年３月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年３月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年３月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告１（昭和55年３月）
第22集　経ヶ峯（昭和55年３月）
第23集　年報１（昭和55年３月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年８月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年３月）
第27集　史跡陸奥国分寺昭和55年度発掘調査概報（昭和56年３月）

第28集　年報２（昭和56年３月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ―昭和55年度発掘調査概報―（昭和56年３月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年３月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告２（昭和56年３月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第１次調査報告（昭和57年３月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年３月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ―昭和56年度発掘調査概報―（昭和57年３月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年３月）
第41集　年報３（昭和57年３月）
第42集　郡山遺跡―宅地造成に伴う緊急発掘調査―（昭和57年３月）
第43集　栗遺跡（昭和57年８月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭―茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書―（昭和58年３月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ―昭和57年度発掘調査概要―（昭和58年３月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ―昭和57年度発掘調査報告書―（昭和58年３月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年３月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年３月）
第50集　岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年３月）
第52集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第２次調査報告（昭和58年３月）
第53集　中田畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第55集　南小泉遺跡―青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年３月）
第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）
第57集　年報４（昭和58年３月）
第58集　今泉城跡（昭和58年３月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年３月）
第60集　南小泉遺跡―倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書―（昭和58年３月）
第61集　山口遺跡Ⅱ―仙台市体育館建設予定地―（昭和59年２月）
第62集　燕沢遺跡（昭和59年３月）
第63集　史跡陸奥国分寺跡昭和58年度発掘調査概報（昭和59年３月）
第64集　郡山遺跡Ⅳ―昭和58年度発掘調査概要―（昭和59年３月）
第65集　仙台平野の遺跡群Ⅲ―昭和58年度発掘調査報告書―（昭和59年３月）
第66集　年報５（昭和59年３月）
第67集　富沢水田遺跡―第１冊―泉崎前地区（昭和59年３月）
第68集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第３次調査報告（昭和59年３月）
第69集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ（昭和59年３月）
第70集　戸ノ内遺跡発掘調査報告書（昭和59年３月）
第71集　後河原遺跡（昭和59年３月）
第72集　六反田遺跡Ⅱ（昭和59年３月）
第73集　仙台市文化財分布調査報告書Ⅱ（昭和59年３月）
第74集　郡山遺跡Ⅴ―昭和59年度発掘調査概報―（昭和60年３月）
第75集　仙台平野の遺跡群Ⅳ（昭和60年３月）
第76集　仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書（昭和60年３月）
第77集　山田上ノ台遺跡－昭和59年度発掘調査報告書－（昭和60年３月）
第78集　中田畑中遺跡－第２次発掘調査報告書－（昭和60年３月）
第79集　欠ノ上Ⅰ遺跡発掘調査報告書（昭和60年３月）
第80集　南小泉遺跡－第12次発掘調査報告書－（昭和60年３月）
第81集　南小泉遺跡－第13次発掘調査報告書－（昭和60年３月）
第82集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ（昭和60年３月）
第83集　年報６（昭和60年３月）
第84集　仙台市文化財分布調査報告書Ⅲ（昭和60年３月）

仙台市文化財調査報告書第82集

昭 和 59 年 度

仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ

昭 和 60 年 3 月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市国分町 3 — 7 — 1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 ㈱ 東 北 プ リ ン ト
仙台市立町24—24 ＴＥＬ63—1166